

第二の誕生

われわれはいわば二度生まれる。一度は生存するため、二度目は生きるために。一度は人類の一員として、二度目は性をもった人間として。……

気分の変化を示す精神的兆候とともに、外観においても、はっきりした変化が生じる。顔つきはおとなびてきて、性格が刻みつけられる。頬の下あたりにはえているまばらな和毛は、濃く、そして固くなる。声は変わり、むしろ出なくなる。彼は、子どもでもなければおとなでもない。……あの魂の器官である彼の目は、今まで何も語らなかったが、今は一つのことばをもち、表情をもっている。燃えあがろうとする火がそれらを輝かせる。前よりも生き生きとしてきたその視線は、まだ清らかな純潔をたたえている。……彼は自分の目がものを言いすぎるかもしれないと感じている。彼は目を伏せて赤くなることを覚えはじめる。自分が何をしているのかわからないうちから感じやすくなる。

(ルソー『エミール』)



1 『エミール』のさし絵

1 人生の中の青年期

● 人生における「第二の誕生」 ●

高校生のあなたは、小さかったころに比べると、いろいろ悩むことが増えてはいないだろうか。勉強の悩み、進路の悩み、友だちづきあいの悩み、恋愛の悩み、性の悩み、などなど。これらは、おとなになるための悩みともいえるだろう。

ずっと子どものままでいられたら、と思うかもしれない。けれども一方で、子どものように、親や先生、まわりのおとなから、いちいちあれこれ言われるのも嫌ではないだろうか。自分のことは自分で責任をもって決める。それが「おとなになる」ということだ。

青年期は、子どもがおとなへと脱皮していく時期にあたる。フランスの思想家ルソーの言葉を借りていけば、子どもとして生まれ落ちた人間が、おとなに生まれなおす「第二の誕生」の時期である。

青年期には、身体(せいじ)の面では、性的な成熟が始まり、おとなの男女としての特徴(せいちゆう)（第二次性徴）がはっきりしてくる。そのためもあって、自分に向けられる周囲の視線が気になるようになり、友人や異性との関係についても、それまでとは違った意識がめばえ始める。

精神(せいしん)の面では、それに加えて、まわりのおとなに指図(さしず)されることをきらい、独立心が強くなっていく。このように、周囲のおとなへの依存(いぞん)から離れて、自立へと向かう過程のことを、心理的離乳(りじう)または第二反抗期(はんこうき)という。

青年は、もう子どもではないけれども、まだおとなにもなりきっていない、境(さかい)目に位置している。ドイツに生まれアメリカに渡った心理学者レヴィン(K. Lewin 1890-1947)は、そのように、子どもの世界にもおとなの世界にも属しきれない、不明確な位置にある青年のことを、マージナルマン(marginal man)（境界人(きょうがいじん)）

▶1 第二次性徴 生殖器官に示される第一次性徴に対して、雌雄（めす・おす）を示すそれ以外の特徴のことを、第二次性徴という。

人間の場合、女性は乳房のふくらみや骨盤の発達、男性はのどぼとけや肩幅の増大などが、それにあたる。

▶2 第一反抗期 第二反抗期に対し、3～4歳ごろのきわだった反抗を示す時期を第一反抗期という。



2 青年期とはどんな時期だろうか

たは(しゅうへんじん) 周辺人) とよんだ。

● アイデンティティの確立 ●

おなじくドイツに生まれ後にアメリカで活動した心理学者E. H. Erikson(1902-94) エリクソンは、人間のライフサイクルを8つの段階に分け、それぞれの時期に応じた発達課題をあげている。そのなかで青年期における発達課題とされているのは、アイデンティティ(identity)（自我同一性(じがどういつせい)）の確立である。

アイデンティティとは、「自分はこういう人間だ」という内的統合感、および、自分の存在を周囲の人や集団に認められているという社会的受容感のことをいう。

私たちは、さまざまな人とかかわりのなかで、ときには葛藤(かつとう)をかかえながら、自らを見つめなおし、アイデンティティを育てていく。他者と向きあい、誠実に(まこと) 対応していくなかから、自らの行動に対する責任感も生まれてくる。

その意味で、アイデンティティの確立とは、自己と他者との協働作業であるといってもいいだろう。逆に、人と正面からぶつかることを避け、周囲にあわせて当たりさわなくふるまうだけであれば、自己を見失い、不安定な(ふあんてい) 精神状態に陥ることにもなりかねない。

子どもは、親がそういうからとか、まわりの人がそうしているからとか、無批判(むひはん) に受け入れてしまいがちだ。しかし、おとなに求められるのは、他者に配慮(はいりよ) し、その意見に耳を傾けながらも、最終的には自分で責任をもって判断することである。

おとなになるとは、単に経済的に自立することではなく、自分自身のうちに行動や価値観の基準(こんきん)・根拠(こんきよ)をしっかりとち、社会的に自立することにほかならない。

	1	2	3	4	5	6	7	8
老年期								統合性 対 絶 望
壮年期							世代性 対 自己陶醉	
成人期						親密性 対 孤 立		
思春期 青年期					同一性 対 同一性拡散			
学童期				勤勉性 対 劣等感				
児童期			自発性 対 罪悪感					
幼児期		自律性 対 恥・疑惑						
乳児期	信頼感 対 不信感							

3 エリクソンの考えた人生の8つの段階における心理・社会的発達課題と危機

▶3 responsibility 英語で「責任」にあたる言葉 responsibilityは、他者に向けて(かたむか) 対応 (response) ・できること (-bility) という意味でもある。

▶4 アイデンティティの拡散 青年が周囲の人との関係のなかで自己を見失い、精神的に不安定な状態に陥ることを、エリクソンは、アイデンティティ拡散の危機とよんだ。



## 臨床心理の知見から学ぶ

## close up 1

青年期の課題とされるアイデンティティの確立という概念も、精神分析家として悩める若者に寄り添ってきたエリクソンが、青年期臨床の現場をふまえながら、フロイトの学説を発展させてできあがってきたものである。ここでは、現代の臨床心理の現場から得られた知見を学ぶことによって、恋愛や進路選択など悩み多き青年期を前向きに生きていくためのヒントを探っていこう。

## 精神分析からカウンセリングへ

フロイトが創始した精神分析では、分析家が患者の心の無意識の領域を「解釈」することが重要であった。

アメリカの臨床心理学者C. R. Rogers (1902-87) ロジャーズも、当初は患者の生育歴・環境・パーソナリティなどの情報を「解釈」し、助言や説明を行っていたが、望ましい成果をあげることができないでいた。

ある少年の治療のため、少年の母親と面接を行っているが、突然母親が夫との関係がうまくいっていないことを語り始めた。その後も、その母親の話をじっくりと聞く面接を続けていくと、夫婦関係が改善されただけでなく、少年の問題行動



- ▶1 「臨床」とはもともと、「病の床の傍らに待る」という意味である。
- ▶2 心理相談の対象者を患者 (patient) ではなく来談者 (クライアント, client) とよぶようになったのも彼が最初である。
- ▶3 カウンセリングは英語のcounsel (相談・助言する) が語源であり、人間関係の悩みや軽度の心理的な症

も消失していった。

これをきっかけにロジャーズは、クライアントの問題探索能力・解決能力を信頼し、患者の話をよく聞きそれに寄り添っていく、**来談者中心療法** (Client-Centered Therapy) とよばれるカウンセリング技法を提唱する。

彼によれば、カウンセラーは、「クライアントを共感的に理解しようとする、クライアントを無条件に肯定し受け入れようとする」という任務を負うという。

ロジャーズの思想の根底には、フロイトにみられるような原罪的な悲観論とは対照的な、人間には自己を実現する力が自然に備わっていると楽観的な人間観がある。

## 鬱状態と認知行動療法への注目

ストレスの多い現代社会では、誰もが鬱状態に陥りやすい。そこで注目されているのが、後ろ向きになりがちな自分固有の「心のクセ」を修正していこうとする認知行動療法である。

ここでいう「認知」とは、外界のものごとを判断したり解釈したりする過程のことである。認知は、気持ちが動揺したときに頭の中に瞬間的に浮かんでくる考えやイメージである「自動思考」と、その自動思考の基礎となる、その人が持続的にもち続けている人生観や価値基準である「スキーマ」から成り立つ。

たとえば、メールを送信しても相手からすぐに

- 状の解消に向けての援助を目的とするものである。これと区別して、精神医学的な治療をおもな目的とする心理療法や精神療法をセラピーとよぶ場合もある。
- ▶4 人間が外界や環境を認識し相互作用を行う際に、その前提として用いる思考の枠組み・図式のこと。



- 5 返事が来なかったとする。それを即座に「自分は相手から嫌われている」と受け止め、関係を失ってしまったという喪失感から悲しい気持ちになり、引きこもりがちになってしまう人がいるかもしれない。
- 10 この場合は、認知 (喪失)、気分 (悲しみ)、行動 (引きこもり) の悪循環が続いていることになる。しかしながら、「自分は相手から嫌われている」という認知は自分の勝手な思いこみにすぎず、友達は仕事が忙しくて返事ができないというのが事の真相なのかもしれない。

**認知行動療法**は、このような自分固有の自動思考やスキーマの特性 (いわば「心のクセ」) を知る認知療法と、日常生活の中で、楽しいことややりがいのありそうなことを意図的・積極的に増やしていくことで自らの行動の変容をめざす行動療法を組み合わせることで、「心のクセ」を修正し、鬱状態からの脱出をめざしていく。

## 依存症と家族システム論的アプローチへの注目

- 25 心理療法におけるひとつの立場に、アルコール依存症や過食症などの症状を、アルコールや食物といった物質に対する中毒とみるのではなく、その背後にある家族などの人間関係への嗜癖 (アドイクション) とみる家族システム論的アプローチがある。

このアプローチでは、アルコール依存症の夫は妻に面倒をみてもらいたいためにアルコールに走り、妻のほうは依存症の夫の面倒をみることに生きがいを見いだしているととらえる。この状態は、

おたがいが自己の存在を証明するために、おたがいをコントロールしようとしているので、**共依存症**ともよばれている。

また、子どもがかかえるさまざまな心理的問題も、個人の問題としてではなく、家族という人間関係のシステムの中での問題としてとらえていく。

親が親としての役割を十分に果たしていない機能不全家族の中で成長した子どもは、自分が自分であるということだけで親に愛されているという情緒的な安心感のなかで自分の生を生きることができず、大人のように周囲を気づかいながら、「親に愛される自分であろう、もっとしっかり生きよう」と無理をしていく (アダルト-チルドレン)。過食症や拒食症などは、その結果、特定の行為を止めることができなくなってしまう症状であるととらえられる。

よって、この症状の治療のためには本人だけではなく、親へのカウンセリングも必要になってくるが、本人自身が「自分もアダルト-チルドレンなのかもしれない」と自己を認知し、ありのままの自分を肯定することで、ふっと楽になれることもあるという。

- ▶5 精神的な病の原因を個人に求めるのではなく、病的なコミュニケーションの連鎖に求めたのが、アメリカの文化人類学者・生態学者ベイトソン (G. Bateson, 1904-80) のダブルバインド論である。

たとえば、「あなたの好きなようにしなさい」という親からの表向きのメッセージと、「でも、しっかり勉強しなさい」という言外のメッセージの二重拘束状態におかれた子どもは、強いストレスを受けることになる。

ここから家族をコミュニケーションによってつくられたシステムととらえるこのアプローチが生まれしてきた。



第1節 古代ギリシアの思想

哲学の始まり

「哲学」という言葉は、フィロソフィア (philosophia) という古代ギリシア語に起源をもつ。これは、知恵を愛し求めるという意味で、古くは知的探究一般を広く指す言葉であった。

古代ギリシア哲学は、イオニア地方における万物の始源の探究に始まり、やがてアテナイ(現在のアテネ)に舞台を移した。命をかけて知恵を愛し続け、「よく生きること」を説いたソクラテス、彼に大きな影響を受けたプラトンとアリストテレスによって、西洋哲学の基礎が築かれた。

プラトンは人間の魂やポリスのあり方など、広範な領域におよぶ哲学思想を対話形式の書物に著し、後の西洋哲学はプラトンの書物の注釈にすぎないといわれるほどの影響を後代に残した。

またプラトンから学んだアリストテレスは、師の学説を批判するとともに、過去の哲学の歴史をふまえて体系的な学問研究の基本的な枠組みを定め、「万学の祖」とよばれた。



1 アテナイのアクロポリス(ギリシア) アクロポリスには、守護神アテネを祭るパルテノン神殿があり、聖域とされた。

1 万物の始源の探究

多様なものを秩序づける存在

紀元前8世紀に、ギリシア文学史上最古の作品とされる、ホメロスの英雄叙事詩『イリアス』が成立したのは、エーゲ海の東に位置する小アジアのイオニア地方である。ホメロスやヘシオドスは、オリュンポスの12神の相克と、神々と人間たちとの関わりを描いたが、その背後には主神ゼウスを中心とした調和があった。

多様な存在を秩序づける一者が存在するという見方は、哲学的探究の中にもみられた。世界にある一切のもの、人間も事物も含むあらゆるものの始めは何か、その根源は何か、を古代ギリシアの哲学者は探究した。

Homeros  
前8世紀ごろ

Hesiodos  
前8～前7世紀ごろ



3 ギリシア神話の神々 (パルテノン神殿にあった彫刻、大英博物館蔵)

2 古代のギリシア世界 おもなポリスと哲学者の出生地

古代ギリシアの哲学書

古代ギリシアの哲学書は、叙事詩や対話篇のような文学形態など多様な形式で、学術書として共通の形態ではなかった。パピルスや羊皮紙写本による長い年月をかけた伝承の中で失われたものが、実際には多い。そのなかで、プラトンの対話篇とアリストテレスの講義録は、後代の哲学への影響が大きく、写本の伝承とその校訂を経て、その多くが現代まで伝えられている。

そして、アリストテレスが当時行った学問区分、たとえば論理学、天文学、物理学、生物学、心理学、形而上学、政治学、倫理学などは、現代の学問区分にまで踏襲されており、学術書の形態を定めるモデルともなっている。

● 万物の始源とは何か ●

「万物の始源(アルケー)とは何か」という問いに答えた最初の哲学者は、ミレトスのタレスだといわれている。タレスは万物の始源は水だとする。ここには、変転してやまぬ多様な世界も究極的にはあるひとつの始源から成り立っている、という見方がある。

以後、生成と消滅をくり返す世界の始源を問う自然哲学には諸説があり、たとえばアナクシマンドロスは「無限定なもの(ト・アペイロン)」、アナクシメネスは「空気」だとした。

サモス島出身のピュタゴラスは、輪廻転生を信じ、魂の浄化のために学問をする教団を結成した。そして万物を秩序づけるものは数的な関係による調和であるとして、数学・音楽・天文学を共同研究し、後の哲学に影響を与えた。

エフェソスではヘラクレイトスが、万物の始源を「永遠に生きる火」とした。そして、万物は絶え間ない流動や対立の中にあるが、自然を秩序づけている「ロゴス(理)」を探究し、それに聴き従うべきだという。

これに対してエレアの Parmenides のパルメニデスは、若き日の存在体験を哲学詩に著し、「あるもの」は一にして、不生不滅、不動であるとした。そしてその弟子ゼノン(Zenon)は、アキレスと亀などのパラドックス(逆説)を用いて多や動が内含する矛盾を示すことで、師を擁護した。

一方、Empedokles のエンペドクレスは、不生不滅、不動の四つの根(火・土・空気・水)を認めつつ、それらの結合と分離によって万物が変転する原理として愛と憎を立て、宇宙の周期的な円環過程を説いた。

他方、Demokritos のデモクリトスら原子論者は、不可分の最小単位である原子(アトム)と、それが運動する場である空虚のみが存在すると考えた。彼らによれば、原子は不生不滅であるが、その配列や組み合わせによって万物は構成され、その離合集散によって、生成変化する世界が成立する。これは現代の物理学にも通じる考え方である。

▶1 ピュタゴラス 数学では三平方の定理にピュタゴラスの名がつけられており、音楽ではオクターブと弦の長さとの比など、現代までピュタゴラスの業績と語り伝えられるものがある。

▶2 アキレスと亀のパラドックス 俊足のアキレスが亀よりも後方からスタートして、競走する。

アキレスが亀のスタート地点に到達した時、亀はそこよりも少し前に進んでいる。亀が進んだその地点にアキレスが到達した時にもまた、亀はわずかに前に進んでいる。結局アキレスは、亀を追い抜くことはできない、というパラドックス。

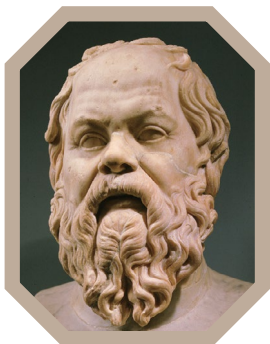
ゼノンは、多や動を前提とするとこのような論理的な矛盾がおこる、ゆえに一にして不動が真であると、背理法によってパルメニデスの説の正しさを示そうとしたのである。

▶3 デモクリトスの倫理学説 デモクリトスは、自然哲学だけでなく、明朗闊達さを達成し適度を知ることにより幸福になるという倫理学説も主張していた。





1 アテナイに残るアゴラの遺跡



2 ソクラテス (前469/470 ~前399)

アテナイの哲学者。故国のために3回にわたり兵士として戦う。強い愛国心から市民としての義務を果たそうと努めたが、一部の政治家などの反感を買い、告発される。裁判でアテナイ市民から死刑の評決を受け、獄中で刑死。著書はなく、弟子のプラトンらの著作にその思想がうかがえる。

▶1 人間は万物の尺度

同じ風が吹いていても、ある人にとっては冷たく、別の人にとっては冷たくなく感じる。冷たさの尺度はそれぞれの人にあり、客観的な尺度はない。プロタゴラスは、正しさについても、それぞれの人が尺度になると考えた。

## 2 ソクラテス

### ●ソフィストの登場●

紀元前5世紀のはじめにペルシア戦争が起こり、ギリシアのポリス連合軍はペルシアに勝利した。その後アテナイでは、直接民主制が発達し、広場(アゴラ)などで活発な討論が行われたが、弁論術が重視されるようになり、衆愚政治に陥った。ペルシア戦争の後、アテナイとスパルタの間で対立が激しくなり、やがてペロポネソス戦争が勃発し、この戦争でアテナイはスパルタに敗北した。

このような状況で、裕福な家の子弟に弁論術(レトリック)を教える職業教師が誕生し、ソフィスト(知恵ある人)とよばれるようになる。彼らは徳の教師として、多額の授業料を得ていた。

徳とは、市民がポリスで活動するにあたって必要となる能力・卓越性と考えられていた。したがって、法廷や民会でどのようにすれば上手に言葉を操り、人を説得することができるのか、これが、ソフィストの授ける術の中核にあった。弁論家として名高いゴルギアスは、弁論術を教えることで、「他人を支配する力」としての徳を授けると公言した。

プロタゴラスは、ソフィストと自称し、「弱論を強弁する」術を教えた。弱論とは、そのままでは裁判に負けたり、選挙などで票を得られないような論である。これをプロタゴラスは、政治的な成功に導くための強い論にする、と公言するのである。たとえ矛盾する二つの論であっても、どちらも説得して真だと思わせれば、いずれも真になると、プロタゴラスは考えていたのである。

このような考えは、「人間は万物の尺度である」とするプロタゴラスの言葉に示されている。多くの人に正しいと思われたことが、そのポリスの法(ノモス)となるのだから、ポリスの構成員が異なれば、それぞれ法も異なる。これは、各人の主観的な判断を超えた客観的な真理が存在することを認めない、相対主義とみることができる。

### ●無知の自覚●

このようなソフィストたちと対峙したのは、ソクラテスである。

ソクラテスは書物を残さなかったので、紀元前399年に刑死したという記録しかない。ソクラテスの裁判事件、そして死も恐れず訴えた哲学的な生き方については、プラトンがソクラテスの登場する多くの対話篇を著している。

プラトンの『ソクラテスの弁明』によれば、「ソクラテス以上に知恵

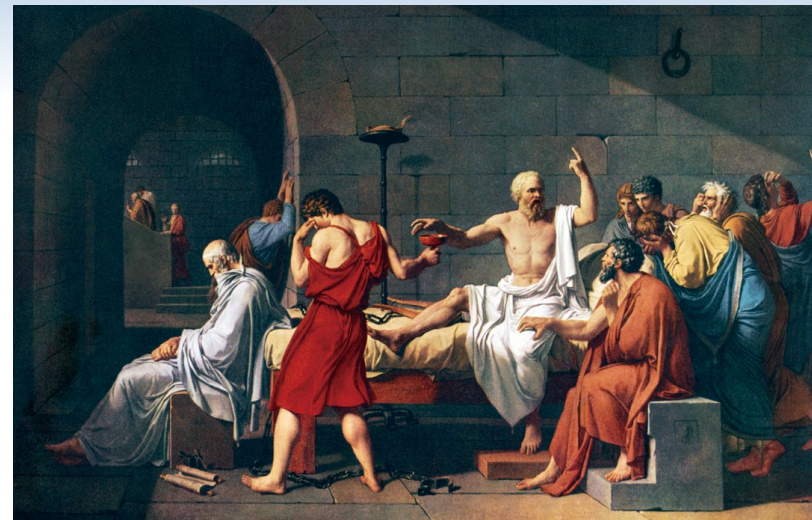
ある者はいない」というデルフォイの神託を受けて、ソクラテスはその真意を測りかねていた。ソクラテス自身は、自分に知恵があるとは思っていなかったからである。そこで、知恵があると自称するソフィストや、自分よりも知恵があると思われる文学者や政治家、技術者とソクラテスは問答する。問答とは、「勇気とは何か」「正義とは何か」といった問題について、一問一答で行われる哲学的な探究の方法である。

問答の結果、知者として名声を得ている人々は、善や美など大切なことがらについて、知っていると思っているだけで、実際には知らないということが明らかになる。その時ソクラテスは、神託でソクラテスについて言われた「知恵」とは、「自分は知らない」ということを自覚している、という意味での知恵だということに気づく。本当の意味で知恵あるものは神のみであり、人間にふさわしい知恵とは、己の「無知の自覚(無知の知)」なのである。

当時、デルフォイの神殿には「汝自身を知れ」という言葉が掲げられていた。これは、不死なる神に対して、死すべき人間が傲慢に陥ることなく分をわきまえるべきだという勧告と解されていた。ソクラテスは、問答を通して人々に無知の自覚を促すことが、神託の真の意味だと気づき、アテナイで問答を続けることが、神が自分に与えた使命だと考えたのである。

しかしソクラテスの問答は、知者として名高い人々の無知を大衆の面前で暴露するものであった。若者がおもしろがり、ソクラテスをまねて問答をはじめようになった。ソクラテスはしだいにアテナイの有力者から危険人物とみなされ、裁判で訴えられる。

アテナイで問答をやめること、あるいは国外追放を受け入れれば、ソクラテスは死刑を免れたかもしれない。しかし、アテナイでの問答は神から与えられた使命と考えていたので、ソクラテスはそれを受け入れられず、死刑の評決が下る。その後、逃亡を勧める友人の説得に応じず、法の裁きに従い、毒の入った杯を仰いだのである。



3 「ソクラテスの死」(ダヴィッド筆、メトロポリタン美術館蔵)

日暮れ前にソクラテスは、牢獄で家族に別れを告げ、弟子たちと哲学の議論をした後、獄吏から毒杯を受け取り、静粛のうちに死を迎えようとしたといわれる。

4 デルフォイの神殿 ソクラテスの友人カイレフォンがデルフォイの神殿に赴き、巫女を通して神託を受けたといわれている。





## ●よく生きること●

ソクラテスは、当時ソフィストとして名高かったプロタゴラスやゴルギアスとも問答を行い、無知の自覚を<sup>せま</sup>迫った。ソクラテスこそ、ソフィスト（知恵ある人）だとみる人々もいた。<sup>1</sup>

▶1 ソクラテスはソフィストか？ ソクラテスは、自分は金銭と引きかえに教授していない、と裁判では弁明した。徳の教育に関しても、ソクラテスはソフィストとはまったく<sup>ちが</sup>違う考えをもっていた。

しかし、ソクラテスが行った哲学の<sup>じっせん</sup>実践は、ポリスでの名声や<sup>めいよ</sup>名誉を求め、<sup>きんせん</sup>金銭を得るためのものではない。ソクラテスがアテナイ市民に対して行った問答は、<sup>けいけん</sup>敬虔、<sup>アレチー</sup>勇氣といった<sup>アレチー</sup>徳が「何であるか」を問い、無知を自覚した上で、それをともに探究する活動であった。ソクラテスはこれを、「<sup>さんぼじゅつ</sup>産婆術（<sup>じょさんじゅつ</sup>助産術）」によって行うという。なぜなら、ソクラテスは、身ごもっている人が出産する助けをするように、問答相手の考えを明確に言葉で表明することを助け、それが真理であるかを吟味するからである。つまり、ソクラテスは自らの無知を公言したとおりの真理を身ごもっているはずはなく、自ら出産して真理を相手に教示するようなことはないのである。

ソクラテスにとっては、知というものは、学習し習得しようとする人が「何であるか」「どのようにあるか」を探究することによって、その人のあり方をつくりあげるものである。それゆえ、徳に関する知は、その人を徳ある人としてつくりあげると彼は考えた。これがソクラテスの**主知主義**といわれるものである。

ソクラテスは、死刑判決を受けた裁判の席で、アテナイ市民に向かって、金銭や名誉を追求する生き方と決別して、自らの魂をよりよくするために配慮することを勧めた。そして脱獄を促す弟子に対しても、ただ生きるのではなく「よく生きる」ことを説いた。これは徳を求めて生きたソクラテスが、人々に哲学を勧める言葉といわれる。



### 哲学の勧め

わたしは、アテナイ人諸君よ、君たちに対して、切実な愛情をいただいている。しかし、わたしが命に従うのは、むしろ神に対してであって諸君にはないだろう。すなわちわたしの息のつづくかぎり、わたしにそれができるかぎり、決して知を愛し求めること（哲学）を止めないだろう。わたしは諸君に勧告し、いつ誰に会っても、諸君に指摘することをやめないだろう。そしてその時のわたしの言葉は、いつもの言葉と変りはしない。世にもすぐれた人よ、

君はアテナイという、知力においても、武力においても、最も評判の高い、偉大なポリス（市民国家）の一員でありながら、ただ金銭を、できるだけ多く自分のものにしたいというようなことに気がつかっていて、恥ずかしくはないのか。評判や地位のことは気にしても、思慮と真実には気がつかわず、たましい（いのちそのもの）をできるだけすぐれたよいものにするように、心を用いることもしないというのは、…（プラトン『ソクラテスの弁明』「プラトン全集1」

田中美知太郎訳 岩波書店



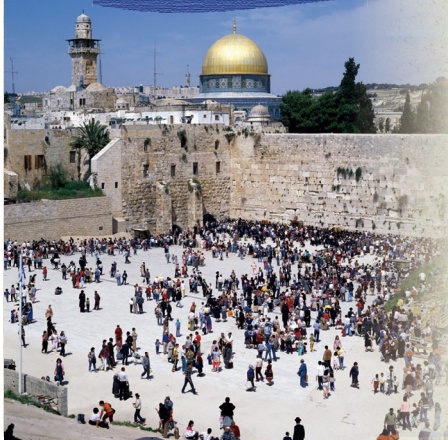
## 第2節 唯一神の宗教

### ユダヤ教・キリスト教・イスラームの始まり

紀元前4世紀ごろ、シリアやトルコなどの西アジアや、エジプトなどの北アフリカを含む中東には、ギリシアの神話や宗教が広まっていた。その後、紀元前後にローマ帝国がこれらの地を支配するにいたっても、ヘレニズム文化の影響は根強く、ギリシア神話の神々や、エジプトやメソポタミア古来の神々を崇拝する多神教が、一般的であった。

ところが、この地域の中から一神教が生まれる。一神教とは、神は唯一であるとする宗教で、他の神々を拜むことや偶像崇拝をきびしく禁じている。この神を信仰する宗教として、最初にユダヤ教が誕生し、次にユダヤ教の中からキリスト教が成立し、さらにイスラームが生まれたのである。

**1 宗教都市エルサレム** ユダヤ教・キリスト教・イスラームそれぞれの聖地がある。



## 1 イスラエル民族と一神教

### ● パレスチナとイスラエルの歴史 ●

ユダヤ教は、西アジアの「肥沃な三日月地帯」の南西部に位置するパレスチナに誕生した。エジプトとメソポタミアにある強大な専制国家にはさまれたパレスチナは、アジアとアフリカ、地中海と紅海・ペルシア湾を結ぶ交通の要衝にあった。そこは、「乳と蜜の流れる地」とよばれ、穀物が豊かに実り、家畜も野生動物も豊富であった。そのため、多くの民族・国家がこの地に興亡した。

イスラエルとよばれる民族は、豊かな土地を求めてメソポタミアを出発し、長い移動の末に前15世紀ごろからこのパレスチナに定住した。その後、エジプトへ移住するが奴隷生活を強いられ、指導者モーセに率いられて脱出する。そしてカナンのででサウル、ダヴィデ、ソロモンと続く王たちによって、イスラエル王国を形成し発展する。ところが王国は分

5

10



2 『旧約聖書』関連地図

**▶ 1 イスラエル** イスラエルは民族・国家の名。ヘブライは主として言語名。ユダヤはイスラエル南部の一地方名であり、そこに住んだイスラエル民族の一支族の名。その後、他の支族はすべて減ってしまったので、ユダヤ人はイスラエル人とほぼ同義に用いられる。ここでは民族名をイスラエルとした。

### 3 イスラエル民族略年表

前13世紀	イスラエル民族、モーセに率いられてエジプトを脱出
前1020?~932?	イスラエル統一王国
前1020?~1004?	サウル王の治世
前1004?~965?	ダヴィデ王の治世
前965?~932?	ソロモン王の治世
前932?	イスラエル王国分裂
前932?~722?	イスラエル王国(アッシリアにより滅ぶ)
前932?~586	ユダ王国(新バビロニアにより滅ぶ)
前7世紀	預言者エレミアの活動
前586~538	バビロン捕囚
前4世紀	ヘレニズム化する
前63	エルサレム陥落





### 十戒

- あなたには、わたしをおいてほかに神があつてはならない。
  - あなたはいかなる像も造ってはならない。
  - あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない。
  - 安息日を心に留め、これを聖別せよ。
  - あなたの父母を敬え。
  - 殺してはならない。
  - 姦淫してはならない。
  - 盗んではならない。
  - 隣人に関して、偽証してはならない。
  - 隣人の家を欲してはならない。隣人の妻、男女の奴隷、牛、ろばなど隣人のものを一切欲してはならない。
- 『旧約聖書』「出エジプト記」20章3-17より

裂しアッシリアにより滅亡する。さらに新バビロニア帝国による征服とバビロン捕囚による民族の離散など、幾多の試練を経験した。

イスラエルは、このような幾多の試練を経験するが、イザヤ、エレミアなど多くの預言者の活動に支えられ、バビロン捕囚から祖国に帰った人々によって、ユダヤ教は確立した。

多神教信仰や偶像崇拜が一般的だった当時、ユダヤ教では一神教を信仰し、偶像崇拜を忌避している。神から選ばれたこの民族が幾多の試練を経て、神が約束した「乳と蜜の流れる地」へと導かれ、将来イスラエルが再建されるという信仰は、一群のヘブライ語の書物に記された。これらは、律法・預言・諸書に分けられ、ユダヤ教の教典となった。キリスト教では、これらは歴史・文学・預言として編纂され、『旧約聖書』とよばれる。

▶1 預言者 神に選ばれて、神のことばを預かり人々に伝える役割を果たす宗教的指導者。

▶2 ユダヤ教 12部族の連合体としてのイスラエルは、ソロモン王の死後に10部族からなる北王国イスラエルと、ユダ族からなる南王国ユダに分裂した。北王国は前722年に、南王国は前586年に滅んだ。

南王国ユダの滅亡後、バビロン捕囚となった国家指導層・知識人を中心に、滅亡したイスラエル国を復興させる思想運動が展開した。それがユダヤ教であり、ユダヤ教の担い手を、ユダヤ人またはユダヤ民族という。

### ●神は人に律法を与え、契約を結んだ●

『旧約聖書』によれば、神は唯一であり、人間に語りかける人格神であり、イスラエル民族の祖アブラハムと契約を結んだとされる(選民思想)。それはこの民族が偉大であったからではなく、むしろすべての民族のうちで最も数が少なかったからだという。

神が人に求めたのは、人が神のことばに従い行動すること、すなわち「主を愛し、心を尽くし、魂を尽くしてあなたの神、主に仕え」ることであった。神は苦境にある人の叫びを聞き、「わたしはある」と人に応え、人と共にいて、人を救いへと導く。神と人との間には、人格的な交わりがある。神の救いがいつどのような仕方であるのか、どのような形なのかは神の自由であり、人間は祈りによって神を思うままに操ることはできない。そして人間には、神に従うことも背くこともできる自由がある。

エジプトからの脱出の直後、神はモーセを通して、シナイ山でイスラエルの人々に十戒を与えたとされる。律法を介した神と人との契約は、神がイスラエル民族を苦境から救ったという体験を通して結ばれたので



将来、あなたの子が、「我々の神、主が命じられたこれらの定めと掟と法は何のためですか」と尋ねるときには、あなたの子にこう答えなさい。「我々はエジプトでファラオの奴隷であったが、主は力ある御手をもって我々をエジプトから導き出された。主は我々の目の前で、エジプトとファラオとその宮廷全体に対して大きな恐ろしいしるしと奇跡を行い、我々をそこから導き出し、我々の先祖に誓われたこの土

地に導き入れ、それを我々に与えられた。主は我々にこれらの掟をすべて行うように命じ、我々の神、主を畏れるようにし、今日あるように、常に幸いに生きるようにしてください。我々が命じられたとおり、我々の神、主の御前で、この戒めをすべて忠実に行うよう注意するならば、我々は報いを受ける。」

『旧約聖書』「申命記」6章20-25

ある。

律法は人を裁くためにあるものではなく、人を繁栄と幸福に導くものであった。イスラエル民族は、与えられた律法を守り、神を愛し、隣人を愛し、どんな困難があっても救いへの希望を見失わず、神とともに生きる生活を理想とした。

### ●唯一絶対の創造神への信仰●

『旧約聖書』によれば、神は唯一であり(一神教)、全能全知の絶対神である。人間も含めて世界のすべては、神によって創造された(創造神)。また、神はみずからの意志をことばやできごとの中で示す人格神であり、神は永遠で完全であり、絶対の正義である。

神は人間の不正にきびしい罰を下す裁きの神でもあったが、神のことばや意思は一方的なものではなかった。義人の祈りやとりなしに耳を傾け、罰を思いとどまる神でもあった。

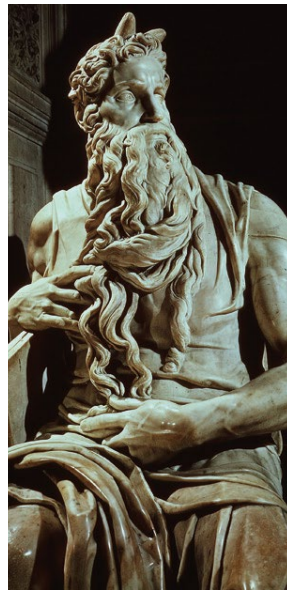
神の被造物である人間は、有限で不完全なもの、弱く誤りを犯しやすい存在であって、人間は神のことばに従うことによるのみ、正しく考え行動することができる。人間についてのこのような自覚が、人々を神に近づけ、この自覚の上に信仰が築かれた。

この信仰は、イスラエル民族の宗教であるユダヤ教の教えとして受け継がれたが、やがてイスラームの『クルアーン』のもとになる教えともなった。そしてまた、後にキリスト教を中心に、西欧の宗教思想に大きな影響を与えたのである。

## 2 イエスの思想とキリスト教

### ●メシア出現への期待●

イスラエルでは、バビロン捕囚からの帰還後もさらに困難な歴史が続いた。多くの預言者の警告にもかかわらず、祭祀をつかさどる特権的な



1 モーセ像 (ミケランジェロ作)

▶3 神の名 神の名は、ヘブライ語でYHWHという4文字で表記された(神聖4文字)。

これを「ヤーウェ」あるいは「エホバ」と読み、これがユダヤ教の神の名、といわれてきた。

しかし当時のユダヤ人たちは、神の名をみだりによぶことが禁じられていたので、名として音読せず、この語が出てくると、「主」と言いかえていたと推察されている。



## 第4節 中国思想

### 私たちと中国思想

親を大切にすることや世間に迷惑をかけないように生活することは、個人の尊重を基本とする現代の社会では時代遅れの、封建的な考え方だと思われがちである。しかし、お盆のように祖先を供養することは、若い人も違和感をもたないだろう。

親を大切に「孝」や、社会の中で自分の役割を果たし、世の中に迷惑をかけないこと、祖先を大切にすることなどは、東アジアに比較的共通する道徳観であり、これらは中国の孔子に始まる儒教の基本的な思想なのである。

中国では、この儒教と、これを批判する老荘思想などのあいだで、人間のあるべき生き方が問われた。

### 1 中国思想の源流

#### ● 天の思想 ●

中国古代の歴史や制度などを記した『書経』や『易経』は、自然や社会を動かすおおもとに天をおいている。

天（天帝）は人間世界の望ましいあり方を、天命として人間に命じる。これにこたえて人々を導くのが天子（帝）であり、後に皇帝と称されるようになるのである。社会の指導者である帝が天命に従い、人々が与えられた役割を十分果たせば、人々は幸福にくらすことができる。

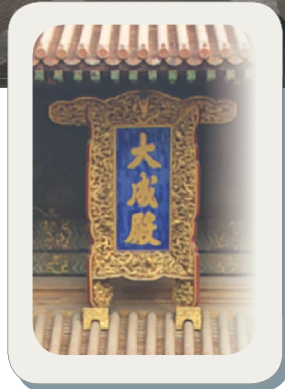
しかし、帝が天命に背けば人々は苦しみ、帝は天から見放され、新しい指導者に取って代わられる。これを易姓革命という。

このように、天命を知ることが、社会の秩序を維持し、人々の生活の安寧を維持することにつながる。

#### ● 諸子百家 ●

中国の王朝は男系男子相続を基本としている。紀元前16世紀ごろにはじまった殷王朝は王位継承を兄弟間で行っていたが、その後は父子相続に変わったとされる。

殷を滅ぼした周はこの仕組みを受け継ぎ、父系の同族集団である宗族をつかって社会秩序を保った。宗族の秩序を宗法といい、宗法にもとづいて共通の祖先を祀った。また、中国の地域社会では社稷とよばれる土地や穀物の神を祀り、これが祖先崇拝と結びついて共同体の扶助や秩序を維持していた。儒者とは、もともとこのような祖先崇拝の儀式を行う職業であり、儒家の祖となる孔子もそのひとりであったといわれる。



1 孔子を祀る孔子廟 (中国、山東省)

▶1 『書経』『易経』『書経』は古代の周公などの統治の記録、『易経』は陰陽の卦によって自然や社会の動きを示したもの。

▶2 天 天はもともと天空のことであり、それが『書経』の時代には天帝として擬人的な神のような存在となった。

戦国時代には抽象化されて人間に内在するものとされ、天と人とは密接な関係があるという天人相関、天人合一の考え方が広まった。

▶3 社稷 社稷とは、本来は土地や穀物の神を祀る祭壇を意味した。転じて国家を指すようになった。



▶2 万里の長城 中国の歴代王朝が、北方の周辺民族の侵入や攻撃を防ぐために築きあげた。

現在残っているものの大部分は明代に築かれたもので、全長6,000キロメートルにおよぶ。

周の権威が衰えた紀元前8～前3世紀には、戦争が続き社会不安が増大したが、春秋戦国といわれる時代は、その一方では、新しい社会秩序を生み出そうという変革もあった。

この時代に生まれた、人間の生き方や社会のあり方についてのさまざまな思想を、まとめて諸子百家という。その中には外交や軍事に関する戦略についての理論を主張するものや、宇宙の生成変化を論じるもの、今日でいえば論理学にあたるものなどもあった。

これらの中で、社会秩序を整え、人々を幸福に生活させる（経世済民）ためにはどうしたらよいか、指導者はどうあるべきか、また道とよばれる本来の人間の生き方はどうあるべきかを考えたのが、儒家や道家などである。諸子百家は、たがいに論争することで、中国の人々の思想を発展させていった。

▶4 道 道（みち）は、孔子ら儒家にとっては人として行すべき道、人倫の意味であり、老子ら道家にとっては、タオとよばれる万物の根源、宇宙の原理というような意味であった。

#### 4 諸子百家

学派	思想家	思想内容
儒家	孔子 孟子 荀子	仁・礼 性善説 性悪説
道家	老子 荘子	無為自然 萬物齊同
法家	韓非 李斯	法治主義
墨家	墨子	兼愛・非攻説
兵家	孫子 呉子	軍事戦略を研究したが、人生哲学にも通じた
名家	惠施 公孫竜	弁論や説得の技術を研究し、論理的な考察を行った
農家	許行	農本思想にもとづく社会秩序を主張した
縦横家	蘇秦 張儀	外交を論じた
陰陽家	鄒衍	陰陽五行説のもととなる原理を論じた



3 春秋・戦国時代の中国と思想家の出身地 春秋時代は、前770～前403年の約360年間、戦国時代は、前403年の晋の分裂から前221年の秦による統一までの約180年間を指す。





1 孔子（前551?～前479）魯（山東省曲阜）の生まれ。姓は孔、名は丘、字は仲尼。貧困と不遇の中で学問を修め、儒教を創始した。魯の役人を経て、諸国をめぐり徳治主義を説いた。晩年は魯に帰り弟子たちの教育に力を注いだ。『論語』は弟子たちが孔子の言行を記録したもの。

1 『論語』の成立 『論語』は、孔子や弟子の言行をまとめたものとされており、朱子（→p.66）が儒学の重要文献である四書のひとつとした。

ただし、『論語』の中には孔子の時代よりもかなり後のものも含まれており、初期儒教の文献とはいえない部分もある。

2 仁と誠 忠、信と類似の概念に誠がある。誠は嘘偽りのない真実を意味し、『大学』や『中庸』での重要な道徳概念である。特に『中庸』では、誠は天の道であり人間世界の真実の基礎であるとされた。後の朱子学は誠に大きな道徳的意味を与え、日本でも伊藤仁斎（→p.90）が重視した。



『論語』の言葉  
巧言令色、鮮なし仁。 （「学而」第一）  
（口がうまく、顔を飾るものには、仁の徳はほとんどない）  
故きを温めて新しきを知る、以て師と為るべし。 （「為政」第二）  
（古いことに習熟して新しいことも知れば、教師となることができるだろう）  
学んで思わざれば即ち罔し。思うて学ばざれば即ち殆し。 （「為政」第二）  
（学んでも自分で考えなければ迷ってしまう。「真理は分からない」。自分で考えても学ばなければ、独断になって危険である）  
君子は和して同ぜず、小人は同じて和せず。 （「子路」第十三）  
（君子は仲良くするが追随はしない。小人は追随するが仲良くはしない）

## 2 儒教の始まり 孔子の思想

### ● 仁の思想 ●

儒家の祖である孔子は春秋時代（紀元前6～前5世紀）の人であり、周が滅びた後に分裂した中国各地を巡って各国の君主に政治を説き、弟子を教育した。孔子の主張は、当時一般に受け入れられたとはいえないが、その言行や弟子の言葉は、『論語』にまとめられて、現代まで大きな影響を与えている。

孔子の思想に一貫しているのは、人々が安心して幸せに過ごすことができる社会をつくることであった。そのためには、社会秩序が守られ、社会の指導者をはじめ人々が人間的に優れた者、つまり、徳のある者になることが必要であると孔子は考えた。

孔子が最も重視した徳は仁である。『論語』の中で、孔子や弟子たちが仁をさまざまに説明している。

仁はまず人を愛することである（「人を愛す」）。愛するとは人を思いやることであり、他者に対して偽らないことである（信）。人を思いやるためには自分自身を欺かないことが必要である（「曾子曰く、夫子の道は忠恕のみ」）。忠とは自分を欺かないこと、恕とは相手を思いやることである。

また、仁は具体的には自分がされたくないことは、他人にもしないということである（「己の欲せざるところは人に施すことなかれ」）。仁はどのように身につけていくのであろうか。仁の原型は、身近な親に対する思いやり（孝）や兄弟に対する思いやり（悌）である（「孝悌なるものは仁の本なるか」）。このような近親への思いやりを拡張し、国家社会の人々みなを思いやるのが仁なのである。

### ● 仁の実現としての礼 ●

仁は心のあり方でもあるので、実際に社会の中で示される必要がある。これが望ましい行為、あるいはそのような行為の集まりとしての社会規範である礼に表されている。たとえば相手に対する尊敬の念は、頭を下げるという礼によって周囲に理解される。

中国では礼はもともと祖先を祀る祭祀儀礼のことであった。人々はこの祭祀によって、同じ祖先をもつ集団として結束してきた。やがてこの祭祀的な結束は法的な秩序となり、社会を安定させる規範・規則となった。

孔子は自然発生的な共同体の秩序である礼を、社会が流動化した時代、新しい国家による統治の時代にあったものとして読み直したといえる。

### ● 礼とは何か ●

礼の本質とは何であろうか。孔子によれば、仁は、自分のわがままや利己的な欲求を抑えて他者を思いやり、社会的に認められている規範である礼を尊重するというかたちで示される（「己に克ちて礼に復るを仁となす」）。つまり礼とは仁を行動や規範のかたちで表すことなのである。

ここで仁礼を身につけた人間と、そうでない人間の違いが明確になる。他者を思いやるためには利己心を抑制しなければならない。抑制できない人間はつまらない人間（小人）である。私たちは仁礼を身につけた人間（君子）にならなければならない。

国家や社会を治める人は君子でなければならない（「己を修めて人を治める」）。『書経』にあるように、利己心を抑えて人々を思いやる皇帝の時代には国家はよく治まったが、利己的な皇帝は人々を苦しめ、没落したのである。仁礼とは人の優れていること、つまり徳である。そのような徳をもって国を治めることが、最も優れた統治なのである（徳治主義）。

孔子はあくまでも現実の社会で、人々が安全に幸福に過ごすことができるために何が必要かを問うた。その意味では彼は現実主義者であり、儒教は宗教ではない。神や人間を超えたものには頼らない（「怪力乱神を語らず」）。また死後の世界など、現実世界を超えたものを議論することも重視しなかった（「いまだ生を知らず、いづくんぞ死を知らん」）。その意味で彼は合理主義者であった。

3 仁と礼 仁はもともと見かけのよさを表す語であったようだが、孔子は内面的なよさとして解釈した。さらに孟子は仁と義を並列することで、孔子の仁が情緒性と規範性の未分化であったのを改め、仁の情緒性を強調した。礼は祭祀としての儀礼がもともとの意味である。礼は天との関係で生まれたものであり、人の行為を前もって制するものである。これは法が行為を後から罰するのと対照的である。

4 礼楽 孔子は春秋以前の周の時代に、周の武王の弟である周公が定めた礼楽を理想とした。楽とは音楽であり、音楽は祭祀の秩序をつくりだし、人々の間に調和と秩序をもたらすものであった。つまり、音楽は政治や天に通じるものであり、儒教の精神を体現するものであった。



徳治主義  
子曰わく、これを道びくに政を以てし、これを斉うるに刑を以てすれば、民免れて恥することなし。これを追びくに徳を以てし、これを斉うるに礼を以てすれば、恥ありて且つ格し。 （「論語」為政 第二）



## 第2節 仏教の受容と展開

### 仏教が日本に与えた影響

「いろはにほへと」ではじまる「いろは歌」は、仏教の無常観が表されているともいわれ、伝承では真言宗を開いた空海の作という説もあった。日常使われている「挨拶」とか「縁起」といった言葉も、もとをたどれば仏教に由来する。

本来の意味は薄れても、現代の日本においても、仏教的な文化やものの考え方は生き続けているのである。

日本の仏教者たちは中国に渡ったり、国内できびしい修行をしたりした。そして、インドで誕生し中国で展開された仏教思想を、日本の風土に定着させ、独自の仏教に発展させていった。

### 1 仏教の伝来と国家

#### ● 仏教の伝来 ●

仏教は、4世紀後半に中国より三国時代の朝鮮の高句麗に伝わり、5世紀後半には新羅や百済に伝わった。

日本には538年(552年の説もある)、百済の聖明王より欽明天皇に仏像・仏具・経論が献上され、仏教が伝来した。欽明天皇が臣下たちに仏像を礼拝すべきかどうかを尋ねたところ、蘇我稲目は肯定し(崇仏派)、物部尾輿は否定して(排仏派)両派は抗争するにいたった。やがて崇仏派の蘇我氏が戦いに勝利すると、仏教は急速に支配層に広まった。

伝来した当初、仏教は深い思想や哲学として取り入れられたのではなかった。仏像は古来の日本の神々(国神)に対し、蕃神・客神、すなわち外国の神として受容され、災厄を祓い福を招く呪的な力が求められていた。

#### ● 聖徳太子の仏教理解 ●

『日本書紀』などによると、聖徳太子(厩戸王)は、日本で最初に仏教を思想として理解した人物として伝えられている。

早くから仏教に親しんだ聖徳太子は、崇仏派の蘇我馬子とともに排仏派の物部守屋を討った。聖徳太子が補佐した推古天皇は三宝を興隆させる詔を発し、これを受けて寺院の建立が始まった。蘇我馬子は日本最古の寺である飛鳥寺(法興寺)を建立し、聖徳太子は四天王寺を建立した。さらに、太子は法隆寺を建立したと伝えられる。推古天皇と聖徳太子の時代は、奈良を中心に仏教が開花し、飛鳥文化が隆盛した。

長らく南北に分裂していた中国に統一王朝の隋ができると、聖徳太子



3 唐招提寺 (奈良県)

は遣隋使を派遣して、大陸の進んだ仏教文化を取り入れることに努めた。

聖徳太子が制定したとされる**十七条憲法**は、その第1条に「和をもって貴しとなし」として、争いのない世の中をめざし、第2条に「篤く三宝を敬え」として、仏教を治世の基本におくことを標榜した。

5 聖徳太子は高句麗や百済から来た僧に仏教を学び、一説には三つの大乘経典の注釈書である『三経義疏』を著したと伝えられる。

聖徳太子の死後の世界を描いたとされる刺繍「天寿国繡帳」には、妃の橘大郎女に語った「世間虚仮、唯仏是真」が記されている。これは、この世の事物は虚しい仮のもので、仏の教えのみが真実とする思想で、

10 日本で初めて現れた現世否定の精神である。

後世、聖徳太子には多くの伝説が生まれ、その後の日本仏教思想史上、重要な役割を果たしていくようになる。

#### ● 鎮護国家 奈良仏教 ●

平城遷都のころより、仏教には律令国家を安泰にさせる役割が求められた。『金光明経』は、その教えを信じれば国が安泰になるとする鎮護国家の思想を説いた経典で、国の法会で盛んに読誦された。

聖武天皇は『金光明経』にもとづき、日本全国に国分寺と国分尼寺を建立させ、その中心として平城京に東大寺を開創した。東大寺には『華嚴経』の本尊である五丈三尺の大仏(盧遮那仏)を造営し、天皇みずから出家して「三宝の奴」と称した。聖武天皇や光明皇后の振興した仏教を中心とする貴族文化は、その時代の元号をとって天平文化といわれる。

奈良には南都六宗とよばれる六つの学派が生まれ、仏教の学問的な研究が盛んになった。

この時代の仏教は庶民にも広まり、行基は民衆を救済するために全国を遊行し、行基菩薩と尊崇された。さらに、唐より苦難のすえ鑑真が渡来し、東大寺や彼が創建した唐招提寺を拠点に、正式な僧となるために必要な戒律の制度(授戒制度)が確立した。一方で、官許のないまま僧になる私度僧も増えた。



#### 十七条憲法

一に曰く、和をもって貴しとなし、作ふることなきを宗とせよ。(略)  
二に曰く、篤く三宝を敬へ。三宝とは仏と法と僧なり。(略)  
十に曰く、こころの忿を絶ち、おもての

嗔を棄てて、人の違ふことを怒らざれ。人みな心あり。心おのおの執るところあり。かれは是非とす。われかならずしも聖にあらざり。かれかならずしも愚にあらざり。其に是凡夫のみ。(略)

▶1 聖徳太子の伝説の検証 現代では伝説と歴史的事実を判別する作業も進められている。



1 上: 東大寺の大仏  
下: 大仏の後背の仏たち (奈良県)



2 聖徳太子 中央の人物が太子と伝えられている(異説もある)。





1 山鹿素行 (1622~85)

儒教をはじめ、広く軍学・歌道・神道・仏教などを学ぶ。古学を提唱し、武士の倫理としての士道を説く。彼の主張は、武士道の体系化に大きな役割を果たした。

著者『聖教要録』

▶1 武士道の転換 戦国時代

時代までの武士の道徳は、山本常朝 (1659~1719) によって述べられた『葉隠』によくあらわれている。その中の「武士道とは死ぬことと見つけたり」は、戦国武士の主君への忠誠と死を厭わない精神をよくあらわしている。

素行はこのような武士道から社会の指導者としての武士道への転換の時代に生きた人物である。



2 伊藤仁斎 (1627~1705)

京都の堀川に私塾「古義堂」を開き、市井の学者として孔孟の精神を説いた。

著者『語孟字義』『童子問』

▶2 仁斎の儒学研究 同様の学派が中国に台頭する

100年前に、日本の一町人が実践していたことは特筆される。

2 朱子学への批判と儒学の新展開

●古学の提唱 山鹿素行●

林羅山から少し遅れて、日本では独特な儒学者たちが登場した。彼らは儒学の正統とされてきた朱子学に対して、本来の儒学の姿をゆがめていると批判した。

山鹿素行は林羅山の門で学んだが、朱子学の理気二元論が仏教や老荘思想と同じく抽象的な理論であって、日用の道徳からかけ離れていると批判した。そして孔子や孟子の言行や著作に返ることを主張したので、彼の提唱した学問は古学とよばれた。

素行はありのままの天地、自然を世界の原理と考え、それが古来の聖人に現れており、聖人の道を誠実に実現しようとするのが武士の道徳(士道)だと考えた。それによって武士は、経済生活にいそむだけで道徳的な修養に乏しい農工商の人民の道徳的指導者(三民の師)になることができる。彼の思想は、武士に戦国時代の戦闘者とは違った新たな生き方を示すことになった。

●朱子学批判と古義学 伊藤仁斎●

山鹿素行と同年代に、町人の中から朱子学を批判して孔子や孟子の古典を第一とした儒学者が伊藤仁斎である。

仁斎の儒学探究の特徴は、『論語』や『孟子』を最も重要な文献と考え、それらを中国語で正確に理解しようとするところであり、仏教や老荘思想によって歪曲された朱子学を排除して儒学を理解すべきだと主張したところにある。このような学問的態度は、本来の意味を明らかにするという意味で古義学とよばれる。

仁斎によれば、朱子学は、世界を理という抽象的な原理で説明しようとする。また個人の道徳的修養も、理を窮めるといふ、現実の道徳から離れたものである。

●日常の道徳●

孔子や孟子の説いたことを字義どおりに読めば、最も大切な徳は仁であり、仁とは愛、愛情であることがわかる。そして仁は義によって補われる。義とはすべきことをし、してはいけないことをしないことである。

人間の本来のあり方(性)は、朱子学がいうような理にもとづくも

(性即理)ではなく、生まれつき天から与えられたもので、また人によって異なるものもある。

このような人間のあり方は、朱子学がいうように敬して真理を見極めるようなことではなく、活動の中で獲得されるものである。人間にとっての真理(道)は日常の活動、身近なところにある(人倫日用の道)。身近な人間の活動は情や欲が大きく関わっており、朱子学が情や欲を否定するのは誤りである。

仁斎はそこから、偽りのない純粹な心情として誠であること(真実無偽)が仁の成立する心の条件だと考えた。そして誠であるために具体的には自分を偽らず(忠)、他人を欺かない(信)ことを実践しなければならないのである。

●古文辞学への発展 荻生徂徠●

伊藤仁斎に影響されながら、彼への批判によって儒学を経世学に導いたのが荻生徂徠である。

徂徠は孔孟の原点に返るといふ古学の考え方を徹底させ、孔子らが理想としたのは六経(『書経』などの五経に『楽経』を加えたもの)であるから、これらの古典を古代の中国語(古文辞)のまま学ぶことを実践した(古文辞学)。そして、中国の古典が朱子学のような抽象的な天理や、個人的な道徳の修養をめざしたのではないことを明らかにした。

儒学が探究すべきは、古代の伝説的統治者たちが国と人民をどのように善く治めたか(安天下の道)である。この古代の王の統治(先王之道)は六経に儀礼、音楽や刑罰、政治(礼楽刑政)として書かれており、これらを時代や国の状況に応じて実践することが儒学の役割である。

徂徠は、儒学を誤らせたとして羅山の流れをくむ山崎闇斎や個人道徳を重視した伊藤仁斎らを批判し、幕府にも政治・経済のあり方を進言するなど、日本における経世済民の学(経世論)の発展に貢献した。

彼の研究は太宰春台、海保青陵らに受け継がれていった。彼らは富国強兵や産業の育成だけでなく、封建制度や鎖国政策に反する市場経済や開国貿易を論じるなど、近代国家への理論的な準備ともいえる主張があった。



3 古義堂跡 (京都府)

仁斎は武士から町人まで京都堀川の「古義堂」で多くの門人を育て、江戸時代の庶民の道徳的修養に大きな影響を与えた。そして、さまざまな藩からの誘いを断り、町の儒学者として人生を終えたことも、彼の誠実さの現れであろう。



誠とは、道の全体、故に聖人の学は、必ず誠をもって宗とす。しこうしてその千言万語、みな人をしてかの誠を尽くさしむるゆえんにあらずといふことなし。いはゆる仁義礼智、いはゆる孝悌忠信、みな誠をもってこれが本とす。(伊藤仁斎『語孟字義』)



4 荻生徂徠 (1666~1728)

江戸の生まれ。父の流罪により上総(千葉県)で独学に励む。のち柳沢吉保に仕えて、幕政にも影響を与えた。実証的な文献学としての古文辞学を確立し、近代的な学問方法への道を開いた。

著者『弁道』『政談』

▶3 徂徠の後継者たち

太宰春台は法家思想に依拠し、藩による専売制を主張した。海保青陵はこれを受け継ぎ、藩による重商主義政策を主張した。



## 第4節 幕末から近代国家への移行



1 上: 地球全図 (尙馬江漢による。18世紀末, 早稲田大学図書館蔵) 2 左: ペリー艦隊 (→p.98)

### 西洋文化との出会い

現代に生きる私たちの生活は、そのすみずみまで西洋的なもので埋め尽くされている。さらに私たちが学んでいる学問の多くも、かつて洋学といわれたものに連なるものが多い。

日本が開国を迫られた江戸時代末期から、日本人は西洋の実用的な知識や技術だけでなく、社会制度や人権思想のような価値観までも受け入れて、封建的な日本を近代国家に変身させようとしたのである。

## 1 西洋文化の受容と対応

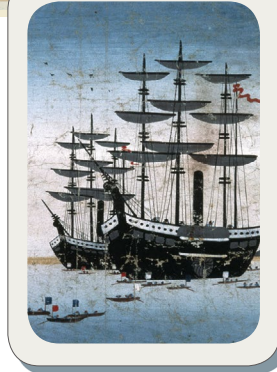
### ● 実用的な学としての蘭学 ●

江戸時代を通じて、日本は鎖国とよばれる政策をとっていたが、西洋の国では唯一オランダとだけは交流をもっていた。八代将軍徳川吉宗は、享保の改革の際に実学を奨励し、その結果として、オランダを通じて西洋の学術、とくに医学、天文学、兵学などの実用的な知識や技術が日本にもたらされ、蘭学として展開した。

医者の前野良沢と杉田玄白は、日本で最初に解剖を行った山脇東洋らの経験や合理性を重んじる姿勢に影響を受けていた。彼らはオランダからもたらされた解剖書の正確さに驚き、この解剖書を翻訳することを決意し、苦心の末『解体新書』として世に送り出した。また、オランダ語通訳を務めたこともある志筑忠雄は、ニュートン力学や自然哲学を紹介する教科書をオランダ語から翻訳し、『暦象新書』として出版した。

これらの成果は、日本に西洋の合理性や実証性を特徴とする本格的な科学知がもたらされたことを意味している。

一方、渡辺崋山や高野長英らは、尚齒会(蛭社)という結社に属し、単に西洋の実用的知識だけではなく、広く国際情勢の知識も得ようとした。このような活動を通じて彼らは、幕府の外交政策に対してその無策・無謀を批判するようになっていった。



▶1 蘭学・洋学 幕末の開国以降、イギリス・ドイツ・フランスなどオランダ以外の国からも西洋学術の知見が直接もたらされるようになると、それらを蘭学という言葉でひとくくりにすることができなくなり、しだいに洋学という言葉が使用されるようになった。

3 『解体新書』(巻之一)の扉絵 (1774年刊行)



4 おらんだ正月 (早稲田大学図書館蔵) 太陽暦の正月を祝う宴が大槻玄沢を中心とする蘭学者たちによって開かれた (1794年)。

### ● 東洋の道徳と西洋の芸術 佐久間象山 ●

それまで日本が範としてきた中国がアヘン戦争においてイギリスに敗北したことや、アメリカの大艦隊を率いたペリーの来航は、幕府のみならず多くの日本人に大きな衝撃を与えた。佐久間象山もそのひとりであり、西洋に対してどのように対峙していくべきかを考えた。

象山は、当初は朱子学を学んでいたが、アヘン戦争を契機に海防の必要性を痛感し、西洋砲術を手始めに、広く西洋の知識や技術を積極的に学んでいった。

しかしその一方で象山は、あくまでも朱子学こそが日本における正統な思想であると考えていた。つまり、象山は、朱子学の伝統である窮理のうちの一つとして、西洋の学問を位置づけていたのである。このことは、「東洋道徳、西洋芸術」という彼の言葉に端的に示されている。

### ● 尊王と攘夷の思想 吉田松陰 ●

幕末に討幕運動の中心的思想となった尊王攘夷論は、もとは尊王と攘夷という、ともに儒教を起源とする別々の概念であった。しかし、外国船の日本沿岸への来航に対する危機感と幕府の弱体化に対する懸念に促されて尊王攘夷論として主張され、やがて倒幕運動へと変化していった。さらにそれは、明治維新後は忠君愛国という考え方に姿を変えていくことになった。

松下村塾において、幕末から明治にかけて活躍した数多くの門人を育てた教育者に吉田松陰がいる。松陰は思想家というよりも行動の人であ



5 モリソン号 1837年に、日本人漂流者を乗せ、交易を求めて来航したアメリカの商船モリソン号を、幕府は砲撃して退けた。この事件をきっかけに、渡辺崋山と高野長英は幕府の外交政策を批判した。



6 佐久間象山 (1811~1864) 信州松代藩(長野県)出身。江戸で儒学・洋学を学ぶが、アヘン戦争での中国の敗北に衝撃を受け、西洋の学問や技術を積極的に摂取することを主張した。開国論や公武合体論を唱えたが、京都で暗殺される。主著『省響録』

### ▶2 東洋道徳、西洋芸術

象山は、道徳や社会体制の面では儒学に代表される東洋の伝統的精神をもとにしながら、西洋の芸術(ここでは科学技術の意)を積極的に摂取して、国力を充実すべきであると説いた。

### ▶3 松下村塾の門人たち

松下村塾で学んだ門人の中には、高杉晋作・久坂玄瑞・伊藤博文がいる。





1 ルネサンス 人間の発見

●ルネサンスの始まり●

ヨーロッパの社会は、11世紀から12世紀にかけての十字軍遠征を契機にして、大きく変容した。東方世界との貿易が活発になり、商業・交易にたずさわる都市の市民階級が勃興した。またイスラーム世界との交通が活発に行われるようになり、イスラーム世界から流入した最新の科学や多様な文物はヨーロッパ社会に大きな影響を与え、哲学や自然科学もその影響を受けて発展した。

1 ルネサンス期の絵画「春」(ボッティチェリ筆 ウフィツィ美術館蔵)

▶1 イスラームからの影響 当時の世界において、イスラーム世界は中国とならぶ文明の先進地であった。

西欧世界では失われていた古代ギリシアの文献も、イスラームやコンスタンティノープルでは盛んに研究されていた。

▶2 イスラーム世界から流入した文物 ルネサンスの三大発明といわれる火薬・羅針盤・印刷術も、中国で発明され実用化されていたものを、イスラーム世界を通してヨーロッパがこの時代に学んだものであった。

このような社会的背景の中で、14世紀から15世紀のイタリアを中心にルネサンスとよばれる文芸復興運動が興った。

ルネサンスはもともと再生・復興という意味の言葉で、この場合には



2 ルネサンスの主要な舞台となったフィレンツェの街並み(イタリア) フィレンツェはルネサンス発祥の地。メディチ家の庇護のもとに繁栄し、ルネサンス文化が開花した。



キリスト教以前の古代ギリシア・ローマの学問・芸術の復興運動を意味した。そしてそれは、中世には教会の支配のもとで抑圧されていた人間性の自由な表現をめざすものであった。

この運動は、16世紀にはイタリアから北ヨーロッパに拡大し、彫刻・建築や哲学・自然科学などすべての分野に広がり、宗教改革運動と並んで近代の始まりを告げた。

ルネサンスの文芸は、現実の人間をいきいきと描いた。その先駆者であるダンテは、『神曲』をラテン語ではなくイタリアの方言トスカナ語という民衆の言葉で書きあげた。ペトラルカやボッカチオの作品は人間解放の精神に満ちている。また、ルネサンス期には、芸術が中世までのキリスト教に從属した立場から、独立的な存在に変わった。

●自由意志にもとづく無限の能力 ピコ=デラ=ミランドラ●

ピコ=デラ=ミランドラは、ルネサンスの思想家としてこのような時代の雰囲気をよく伝えている。『人間の尊厳について』には、彼の思想の根本的立場が鮮明に記されているが、同時にそれは新たな時代の人間観の宣言でもあった。

ピコによれば、人間は自由意志によって自己自身を形成していく自由で独立した存在であって、他の何ものにも從属しない。人間は神によってそのような存在として創造されている。

人間は「動物のように」欲望のままに流されて、墮落することも自由である。しかし、人間は、自らに与えられた自由に従って努力することにより、無限の可能性を現実のものにすることができる。このように自由意志をもった人間の尊厳をピコは主張したのである。

3 左上：ダンテとその著作『神曲』の光景、フィレンツェの街

4 右上：ボッカチオの物語集『デカメロン』(15世紀のさし絵)

▶3 ラテン語 ラテン語は、ローマ帝国の公用語であったため、知識階級の言語、カトリック教会の公用語として使われ、ダンテの時代も、文学作品はラテン語で書くのが一般的であった。



あらゆる他の被造物の本性は、私が定めた法則によって決まっている。ただおまえ(人間)だけが、全く束縛を受けない存在である。私が、おまえに委ねた自由意志によって、自分自身を形成してゆくのだ。

(ピコ=デラ=ミランドラ『人間の尊厳について』)



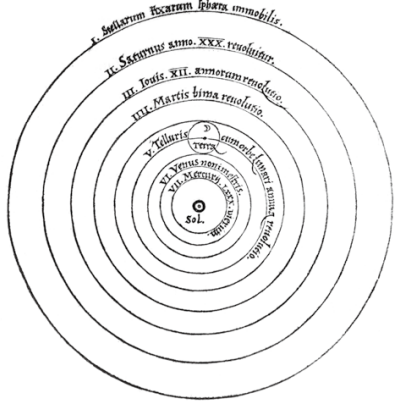
## 第2節 近代科学と人間

### 科学技術の始まり

私たちの日々の生活は、科学技術によってつくられたものに取り囲まれ、ますます便利で快適になった。科学技術の発達は、私たち人類に限りない幸福をもたらすかのように思える。

しかし一方で科学技術の発達は、核兵器など大量殺戮兵器を生み出し、地球規模の環境破壊を引きおこすなど、地球という生態系を滅ぼしかねない事態をもまねている。また、近年では、遺伝子操作など新しい技術を用いて、生命を直接に操作することも可能になりつつある。

私たちは今日、科学技術のあり方を根本的に問い直すとともに、毎日の生活のあり方や、人類と科学技術の未来にまで考えをめぐらす必要に迫られている。ここでは、科学技術の発達を押し進めてきた科学的な考え方、そして、近代的な知のあり方について理解を深めていこう。



**1** コペルニクスによる地動説の図 地動説は、太陽を中心に地球をはじめとする他の惑星の天球が回転している考え方。従来は、地球を中心に他の惑星の天球が回転していると考えた天動説が公認されてきた。

**▶1** コペルニクスの地動説 コペルニクスが著書『天球の回転について』で利用した天体観測のデータは、従来のものとはほぼ同様のものであった。

しかし、彼の地動説は、古代ギリシアの自然哲学者アリストタルコス（前310?～前230?）の提唱した地動説などにもとづき、より明解で数学的な整合性を備えており、プトレマイオスの複雑な天動説に代わるものとなった。

**▶2** ガリレイと地動説 ガリレイは、地動説を支持したために宗教裁判にかけられ、地動説の撤回を余儀なくさせられた。360年後の1992年、ローマ教皇ヨハネ=パウロ2世は、裁判の誤りを認めて謝罪し、その名誉を回復した。

## 1 近代科学の成立

### ● 自然観の転換 天動説から地動説へ ●

中世のヨーロッパでは、絶大な権威をもったキリスト教の神学が真理の基準であった。しかし、ルネサンスや宗教改革を経て、自然をありのままに観察し、自然の法則を見いだしていこうという動きが起こってきた。ルネサンス以降、ヨーロッパ世界における科学的なものの考え方は、まず天文学の分野で大きな発展をみせた。

中世におけるキリスト教的な宇宙観・世界観では、アリストテレスや古代ローマの地理学者プトレマイオスが唱えた天動説がキリスト教神学と結びつき、カトリック教会の公認学説とされていた。

しかし16世紀に、ポーランドの**コペルニクス**が地動説を唱えた。その後、ドイツの**ケプラー**やイタリアの**ガリレイ**が、天体観測で得られた結果にもとづき、地動説の正しさをより法則的・実証的に証明した。

ケプラーは、楕円軌道などの惑星運動に関する三つの法則を発見し、ガリレイは、自らが開発した望遠鏡で観測を行って太陽黒点の動きや木星の衛星を発見したことなどにより、地動説の正しさを確信し、公に支持した。

ガリレイは、「自然という書物は数学の言葉で書かれている」と述べている。そして、天体観測のほかにも、振り子の運動や斜面を利用した球体の落下運動に関する実験を行い、物体の自由落下運動の法則を数学的に定式化した。ガリレイのこうした力学上の発見は、コペルニクスに始まる地動説の展開とともに、物体はすべてそれぞれの目的に向かって

### パラダイム-シフト

20世紀のイギリスの科学史家バターフィールド（1900～79）らは、ヨーロッパにおける17世紀の近代科学の成立について、科学革命という呼称を広めた。

バターフィールドは「この革命は近代世界と近代精神の真の生みの親として大きく浮かび上がってきた」（『近代科学の誕生』）と、科学革命の意義と歴史的重要性を説いている。

また、アメリカの科学史家クーン（1922～96）は、バターフィールドらによる科学革命の考え方を一般化させて、パラダイム-シフト（思考の枠組みの転換）としての科学革命を唱えた。

それによれば、新たな科学理論の成立は、観測データのたんなる集積や新事実の発見のみにもとづくものではなく、むしろ自然に関する考え方の根本的な変革にもとづくものである。

運動するというアリストテレスの自然観（目的論的自然観）を大きく変えて、近代の機械論的自然観に道を開くこととなった。

### ● 近代科学の誕生とヨーロッパ文化 ●

こうした成果をふまえて、イギリスの**ニュートン**は万有引力の法則を発見し、地上においても宇宙においても、すべての物体が同一の法則のもとに運動していることを、その主著『プリンキピア』において明らかにした。この発見は、これまで地上のものと天上のものとを二分して世界を理解してきた従来のキリスト教的な世界観を大きくくつがえす、画期的なものであった。

コペルニクスらによる地動説の提唱からニュートンによる万有引力の法則の発見などにいたり、17世紀のヨーロッパ世界は観察や実験にもとづく科学的な考え方を発展させ、近代科学の集中的で飛躍的な形成期を迎えるのである。

もっとも、地動説に始まる近代科学の形成においては、太陽崇拝や数学的整合性を求めようとする新プラトン主義、神の被造物としての宇宙を解き明かそうとするキリスト教的な世界観などの果たした役割も大きい。したがって、近代科学はキリスト教的な世界観のたんなる否定としてではなく、それまでの古代ギリシア文化から中世ヨーロッパにおけるキリスト教文化、さらにはイスラーム文化のように、ヨーロッパ社会に影響をもたらしたさまざまな文化を母体としつつ成立したといえる。

そして、それ以降はこの近代科学そのものが、ヨーロッパ文化を大きく特徴づけていくことになるのである。

### ▶3 技術と学問の結合

16世紀には、職人や技術者が技術的知識を、印刷出版の出現を利用して公開するようになった。

知識階級の思弁的・論証的な知識が、この技術的知識と結合することにより、17世紀の科学革命へと発展していった点も重要である。

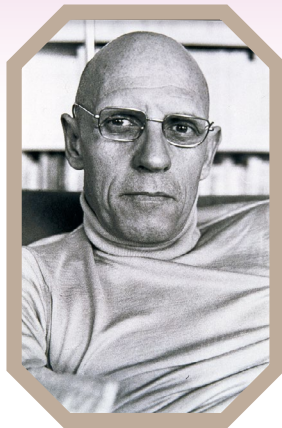


**2** ガリレイ著『天文対話』の扉 地動説を支持する人、天動説を支持する人、中立的な人の3人が対話する形式で、地動説を解説する。

**▶4** 新プラトン主義における数学の位置づけ 新プラトン主義では、数学にこそ宇宙の本質が見られるとした。

**▶5** イスラーム文化の影響 イスラーム世界で発展していた錬金術や占星術的な要素をあわせもった医化学、天文学などの科学的な知識も、中世以降のヨーロッパにおける自然観の形成に大きな影響を与えている。





1 フーコー (1926~84)

10代の頃より、自身の同性愛傾向に悩み、自殺未遂事件を起こした。マイノリティの立場から、近代において常識とされている学問や人間観がどのように作り出されてきたかを、社会史の手法を用いて明らかにした。

主著『言葉と物』『監獄の誕生』『性の歴史』

### ●知と権力 フーコー●

フランスの哲学者・社会学者のフーコーは、「真理」と称されているものは力への意志が生み出した解釈にすぎないとするニーチェの真理観の立場から、ある「知の体系」を「真理」として受け入れさせる、時代ごとの特殊な知の枠組みについて考察した。精神医学は、「理性」が自らを正常なものとし、それ以外を「狂気」とよんでその持ち主を「精神病院」に隔離することで成立してきたという。また彼は、カント哲学にみられる「理性をもった人間」を中心に据える学問は19世紀の特殊な知の枠組みの中で生まれてきたものにすぎず、決して普遍的なものではなく、20世紀に入り「無意識」に注目した精神分析学や「野生」に注目した文化人類学があらわれてきたとした。

### ●「自己への配慮」という抵抗●

ここで彼が問題にした権力とは、現代では学校や会社などの私たちの日常という場において働いている「不可視の」微細な権力である。人間の「主体」というものも、たとえば教師と生徒という権力関係の中で、生徒自らが教師の視線を内面化し、教師の要求する答えを自分自身の答

▶1 生権力 フーコーは、近代以前の権力は従わなければ殺すというものだったが、近代の権力は、人々を生かしておいてその生に介入し管理しようとする特質を持つと分析し、これを「生権力」とよんだ。

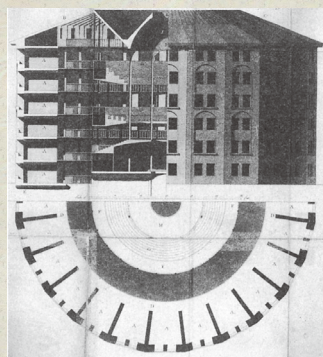
▶2 告解 カトリック教会では、洗礼後に犯した重大な罪は、それを司祭に対し秘密裏に告白する告解の儀式を行うことで、赦されるとする。

▶3 行為実践 フーコーは、この行為実践の繰り返しの中で、「異性愛」というものが人間の性的欲望の「真実」とされてきたと指摘した。

### 生権力と「主体」

その後フーコーは、「生権力」という概念の下に、人々がどのような権力関係の場に置かれているのかを考察した。彼は、生権力の一つ目の類型として、ベンサムが設計した一望監視型(パノプティコン)の刑務所をとりあげ、それを囚人に看守の視線を内面化させ、支配に従順に服従する主体を形成するための規律訓練装置としてとらえた。

次に彼は、より積極的に「自ら服従する主体」を形成する権力の例として、教会における告解制度を取り上げた。フーコーは、従来「真実」を語ることで自由を得ることができるという文脈で論じられてきた告解という制度の中に権力関係をみて、人々はキリスト教徒としてのアイデンティティを得るために、宗教上の罪悪や性的欲望などについて自分が何をしたのかを語るという行為実践を行わされていると捉えた。そしてこれを、精神分析にも連なる権力形態であると指摘した。



2 パノプティコン型刑務所の図 円形で周囲に独房が並び、中心に監視所が設けられる。

えとしてしまうことによって、形成されていく。社会は常にこのような権力構造によって支えられており、私たちが権力というものから解放される状態を想定することは非現実的である。しかしながら、私たちが日常の行為を行うことの中には、常にその権力に対する抵抗の可能性が含まれていると捉えることができる。

後期のフーコーは、他者の支配を受け入れてしまい、そのことすらみえなくなってしまうような「主体」のあり方とは違った生き方を、自らの生を芸術作品としようとする古代ギリシア人の「生存の美学」や「生の技法」の中に探っていった。それは、自己への配慮という倫理的実践に比重を置いた権力への抵抗であり、危険を顧みないで自らの「真理」を語る「勇気」が求められる実践であった。

### ●「機械」と「生成変化」 ドゥルーズ●

ドゥルーズは、「～とは～である」というように、事物の「本質」を一般性の水準でとらえようとしてきた従来の「同一性の哲学」に対し、特異性の水準からの「差異の哲学」を構想した。あらゆるものは運動や変化の中にあり、「同一性」もそのプロセスの結果にすぎない。反復は常に「差異」をはらんでおり、同一のように見えるだけなのである。「差異の哲学」は、他のものとの比較から「差異」を捉えるのではなく、それ自体の「差異」を捉える。時速100kmの感覚は、時速50kmの感覚を二つ重ねても得られない度合いをもつ。ドゥルーズはこのような「差異」の度合いを「強度」と呼び、質や量以前のこの「強度」がわれわれの感性を発生させているとした。この発想は、理性や悟性の認識能力を特権化するカントの認識論を超え、アリストテレスのような人間中心的存在の序列化を解体し、動物やダニといったそれぞれの環境を生きるすべての存在を対等なものとして肯定する。

差異の流れの中にあるわれわれの欲望は、つねにより一層多様なものとの結合を望んでいく。ところが、精神分析が父を中心とする家族の中に欲望を封じ込めようとしたように、禁止を含む超越項に支えられた「構造」の中で、欲望は一定方向にコード化されている。ドゥルーズとガタリは「構造」を「機械」と捉え直し、「機械」の「部品」や「歯車」としての法律やモラル、身体管理法などがわれわれの生や身体にどのような力を及ぼしているのかを考察した。そして、欲望を超越項なしに内在化し、自他の流動的な「生成変化」を促す新たな倫理学を構想したのである。

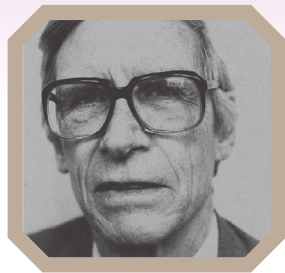
▶4 自己への配慮 それは、アイデアという普遍的な真理に到達するために、肉体から魂を切り離し、金銭や名誉などの日常的欲望と決別し、本来のありかたに純化することを目指すプラトンの述べた「魂への配慮」ではなく、「自己」のこの「生」にこだわり、自分の身体や性、他者との関係に配慮をするというものである。



3 ドゥルーズ (右、1925~95)

フランスの哲学者。ベルクソン、スピノザ、ニーチェなどを独自の視点から読み解き「差異」の哲学をうち立てる。一方、精神分析家ガタリ(左、1930~92)との共著で、多様な欲望の肯定による「生成変化」をめざした。主著『差異と反復』、共著に『アンチ・オイディプス』『ミル・プラトール』。





1 **ロールズ** (1921~2002)  
アメリカ、ボルチモアに生まれる。ハーバード大学などで教鞭をとった。名著『正義論』

## 6 民主主義と公正の両立

### ●公正としての正義 ロールズ●

人類が直面している大きな課題のひとつは、民主主義や自由主義経済と公正の調和をどうはかるかという問題である。多数決制度は少数者に不平等を強いる傾向があり、市場経済での自由競争を放任すれば経済的格差が拡大してしまうからである。

アメリカの政治哲学者**ロールズ**は、社会契約の方法を用いながら、自由と平等の両立をめざす福祉政策のあり方を論じた。

1960年代のアメリカ社会は、黒人差別の廃止を求める公民権運動などにより、自由と平等という建国以来の根本理念が動揺し、論争的になっていた。たとえば、平等についてアメリカで広く受け入れられていた考え方は、経済活動や教育などにおいて、全員に平等なチャンスを与えるという**機会の平等**であった。ところが、公民権運動の成果として、就職や就学にあたって黒人などのマイノリティグループに一定枠を割り当てるといった**アファーマティブ・アクション**が実施されるようになった。これは、形式的な**機会均等**だけでは実際の差別は解消されず、真の公正のためには**結果の平等**を重視すべきだという立場に立つものであった。

ロールズの理論は、こうした時代状況を背景として、自由と平等の関係に正面から取り組んだものである。彼は、功利主義の「最大多数の最大幸福」の原理を、全体の利益増大のためには少数者切り捨てを容認する危険性があるとしてしりぞける。そして、功利主義の「効率としての正義」という発想に対し、「**公正としての正義**」を掲げ、公正な社会を実現するための**正義の原理**を導き出そうとする。

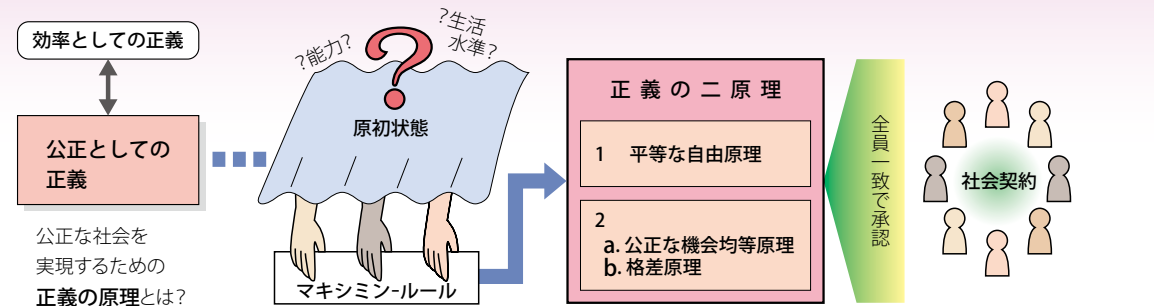
まず、伝統的社会契約説における自然状態を、社会のすべての成員が「**無知のヴェール**」をかけられ、自分の能力や生活水準などの個人情報を知らない**原初状態**（オリジナル・ポジション）にあるととらえ直した。この不確実な状況下では、人々は、想定される最悪の事態の中で、最もましなものを選択する**戦略**（マキシミンールール）に従うであろう。こうして導かれるのが、次の**正義の二原理**である。

1. 各人は基本的な自由（政治的自由、言論・集会の自由、良心と思想の自由など）を平等にもつべきである【**平等な自由**】。

▶1 **アファーマティブ・アクション** 積極的差別是正策。構造的な差別を解消するための暫定的措置として、差別を受けているグループに有利な条件をつけ、実質的に平等が実現するようにすること。

こうした政策に対して、白人保守派の中から「逆差別」だという批判がなされ、大きな論争が続くことになった。

2 **人種差別撤廃を求めるデモ**に集まった人々（1963年、アメリカ、ワシントン）手前は、1960年代に黒人解放・公民権運動に尽力したキング牧師（1929~68）。



3 **ロールズの考える「正義の二原理」**

【**平等な自由**】。

2. 社会的・経済的不平等は、

a 公正な競争の機会を全員に与えたいうえで生じたものに限られ

【**公正な機会均等原理**】、

b 社会的に最も恵まれない人々の状況を改善するものでなくてはならない【**格差原理**】。

ロールズは、この正義の二原理によって、不平等の限界を定めようとした。また、この正義の二原理は人々の社会契約によって全員一致で承認されるとして、ほとんど過去の思想と見なされていた社会契約説を新たな形で復活させた。

正義の二原理は、先に述べたように、公民権運動における人々の意見と一致するように、ロールズによって基礎づけられたのであり、この二原理と人々の道徳判断の一致を「**反照的均衡**」とよび、人々は試行錯誤を通して反照的均衡に達するとした。

ロールズは、基本的自由の平等な割り当てを保障しつつ、結果の不平等を是正しようとする福祉政策をも理論的に基礎づけようとしたのである。この主張は大きな反響をよび、自由と平等のあり方をめぐる活発な議論を巻き起こした。

### ●生き方の幅の平等 セン●

経済学と倫理学の統合をめざす**セン**は、近代経済学の主流をなす「自己利益を追求する利己主義者」という人間観を「合理的な愚か者」とよんで批判した。そして、他者への共感やコミットメントという道徳感情を重視する彼自身の人間観を対置した。

また、所得や資産の平等を中心とするこれまでの経済的平等論では、人間の多様性を十分には考慮できないと批判する。たとえば、身体の不自由な人の困窮の程度は、その人の所得だけでは判断できない。

センによれば、重要なのは、各人が自ら価値あると考える生き方をす

### ▶2 反照的均衡

(reflective equilibrium)

個々の事例について私たちが下した道徳的判断と、それらの判断の根拠となる一般的な道徳原理とを照らしあわせ、相互調整しながら判断と原理の理想的な適合を探究すること。反省的均衡ともいう。



4 **セン** (1933~)

インドのベンガル州に生まれる。10歳の時に300万人の死者を出したといわれるベンガル大飢饉を体験、これが彼が経済学に向かい、飢饉や貧困の調査・分析に取り組む原体験となった。



## 自由の拡大 ― 「消極的自由」と「積極的自由」

20世紀イギリスの哲学者バーリン(1909~97)によれば、自由の概念は「消極的自由」と「積極的自由」の二つに区別される。「消極的自由」とは他人から干渉されない自由で、「～からの自由」とも言われる。言論や信教の自由などがこれにあたる。それに対し、「積極的自由」とは、自分の行動を自らの選択により決定する自由、理性的な自己支配・自己実現の自由で、「～への自由」とも呼ばれる。バーリンは、「消極的自由」こそが本来の自由であると主張した。それに対し、「積極的自由」は、理性的な自己支配が、理性の同一化作用を通じて理性的な指導者による非理性的な大衆の支配という論理に転化し、全体主義につながる危険があると論じた。

センは、バーリンの議論を踏まえつつも、自由の適切な観念は、積極的かつ消極的なものでなければならない、とする。そして、自由の拡大は、消極的自由だけでなく、積極的自由の拡大すなわち生き方の幅の拡大をもたらさなければならないと主張している。

▶1 バーリンの指摘によれば、消極的自由は主にホブズ、ロック、ミルらイギリスの哲学者によって、また、積極的自由は主にルソー、ヘーゲル、マルクスらヨーロッパ大陸の哲学者によって提唱されてきた。

ることができる自由であり、センはこの自由を潜在能力せんざい capabilityとよぶ。これは、潜在的な可能性、生き方の幅はばと言い換えることもできる。たとえば、高校生が進路を選択しようとした場合、貧困ひんこんや障がいしょうがいにより進学が困難な生徒は、経済環境にも健康にも恵まれ多くの選択肢が可能な生徒に比べ、ハンディキャップがある。センの考え方では、そうしたハンディを是正し、自己実現のための選択肢を均等に保障してこそ、本当の意味で機会の平等を保障したことになる。

センはこうした立場から、人々が主体的に選択できる生き方の幅（潜在能力）を拡大し、衣食住、社会生活への参加などの基本的な潜在能力を平等に保障することこそが、公共政策の目標であるべきだと主張する。

センは、現代の世界に存在する分配の不平等と貧困の解決をめざし、地域開発などの問題に取り組むなかで、現代における飢饉のおもな原因が、食糧の絶対的な不足というより、食糧を分配する制度・政策の欠陥にあることを、実証研究によって明らかにした。そして、報道の自由があり、議会選挙が定期的実施されている民主主義国では、飢饉は発生

しないと指摘する。

発展途上国への開発援助に関して、開発を自由の拡大という基準でみるべきだと考えるセンは、経済成長率だけを重視するあり方を批判する。そして、人々のあいだに大きな経済的不平等があるか、自分の意見を表明できる自由があるかなど、別の物差しを示し、途上国支援のあり方に変化をもたらした。

1 ベンガル大飢饉(1943年、カルカッタ) 配給の食糧を手に入れるために長い列をつくる人々。







### 人工知能の急速な進化



1 疲れを知らず頭脳労働を続けるAIロボット

近年、人工知能(Artificial Intelligence, AI)が飛躍的に進化し、言語を解釈して自律的に学習・判断できる能力を持つようになってきた。

また、人間の脳を参考にした技術により、概念や意味を理解できるAIの研究・開発も進んでいる。

すでにAIは企業の窓口業務や医療機関など多くの分野で利用され始めている。アメリカでは年間10億本もの新聞記事がAIによって書かれている。少子高齢化が進む日本では、AIやそれを搭載した次世代ロボット、自動運転車などが人手不足解消に貢献することも期待される。

### 人工知能に雇用が奪われる？

AIの発展により、人間は、単調な事務仕事や危険な重労働などから解放されるかもしれない。しかし、今後5割以上の雇用がAIに奪われる可能性があるという予測が出されるなど、不安も広がり始めている。IT技術は先行して技術を開発した企業などに利益が集中しやすい構造になっているが、AI技術の進歩により、その傾向が加速され、多くの人々が職を失う厳しい状況も予想される。

したがって、AIが苦手とする創造性、直観力、対人スキル、目的設定力などを養う教育が重要になるだろう。

### 人工知能にどこまで判断を委ねるべきか

最近の自律的に学習し判断するAIは、開発者でさえ認識・判断の根拠が分からないという。そうしたなかで、身体や生命の安全に関わる領域に

において、どこまでAIに判断を委ねてよいか、といった倫理的・法的問題が浮上しつつある。また、自動運転車が事故を起こした場合の責任はメーカーか所有者か、といったAI利用に絡む法的責任の問題も整備しなければならない。AI技術を利用した医療データの活用や対話型ロボットの場合、プライバシーを守るためのルール作りが不可欠になる。

### 人工知能が人間の知能を超える日が来る？

コンピュータの性能が今後も急速に進歩していけば、いずれAIが自己学習能力により自らの能力を高め続けて人類全体の知能を上回り(この時点を「シンギュラリティ(技術的特異点)」と呼ぶ)、それ以降は人間の頭脳レベルでは予測も理解も不可能になるとする説が出され、賛否の議論を呼んでいる。

現在のスーパーコンピュータの性能は、30年前のもの1000万倍以上である。この技術進歩の劇的な早さが今後も続くと思定され、AIの進化を牽引する。技術進化の早さに振り回されずに制御し続ける慎重な対応が求められる。巨大IT企業が規制無しにAIの開発競争に突き進んでいる現状を考えると、AI技術に関する安全面のルール構築が今後の大きな課題となる。

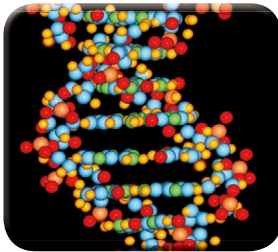
### 人間のあり方が問われる

以上のように、AIの進歩によって、人間生活に根本的な質的変化が引き起こされ、人間のあり方そのものが問われる日が近い。

誰もが、人間とは何か、人間にしかできないことは何か、人間の尊厳とは何かといった哲学的問いを突きつけられる時代に入ったことを認識する必要があるだろう。



# 科学は生命にどこまでかかわるか



1 遺伝情報を担うDNA (立  
体モデル)



2 二重らせんの発見 1953  
年、ワトソンとクリックは、  
DNAの二重らせん構造を発見  
した。



## 患者の権利章典

(アメリカ病院協会、1973年)

1. 患者は思いやりがあり  
礼儀正しいケアを受け  
る権利がある。
2. 患者は、患者が理解で  
きると医師が常識的に  
判断するような言葉づ  
かいで、医師から、自  
分の病名、治療法や予  
後についての最も最近  
の情報を告げられる権  
利をもっている。……
3. 患者は、いかなる医療  
や治療でも、それらが  
始められる前に、イン  
フォームド・コンセント  
を与えるのに必要な情  
報を担当医から受ける  
権利がある。……

## バイオの時代と生命倫理

生命科学や**バイオテクノロジー** (生命工学) が、20世紀後半から飛躍的な発達を続けており、21世紀はバイオ (生命) の時代になるだろうと予想されている。

1970年代に遺伝子組み換え技術が確立され、科学技術が本格的に生命に介入するようになった。1980年代からは、さまざまな先端医療技術の実用化により、人間の生と死のあり方に関しても人為的な選択の幅が拡大されることになった。

こうして、胎児診断にもとづく出産選択の是非、脳死と臓器移植の問題、人工延命技術の発達にもとまう尊厳死の問題など、これまでになかった多くの倫理問題が発生し、それらに取り組むために「生命倫理 [学] (バイオエシックス)」という新しい分野が成立した。

その特徴は、生命をめぐる新たな難問に、倫理、法律、社会などさまざまな角度から総合的に取り組もうという点にある。巨大化した生命科学技術をコントロールし、ときには利用を制限するための倫理的基準を設けることは、人間に課された最も大きな責任のひとつになっている。

## 患者の権利 インフォームド・コンセント

バイオエシックスは、1970年ごろにアメリカで誕生した。その背景には、医療技術などの発達とともに、1960年代の公民権運動、消費者運動などで高まった人権意識が医療分野にもおよんだことがあった。一般市民の医療変革運動によって、患者の権利が確立されていったのである。

その柱は、**インフォームド・コンセント** (十分な説明と理解にもとづく同意) と患者の**自己決定権**の重視である。それまでのアメリカの医療は、医師によるパターンリズム (父親のように善意で干渉すること) と権威主義の傾向が強かったとされる。そうした傾向に対し、患者を医療サービスの消費者とみなし、患者が必要な情報を知る権利とその情報にもとづいて自己決定する権利を尊重することで、医師と患者の関係を、上下関係から対等の関係へと転換することがめざされたのである。

## 母は誰か 生殖革命がゆるがす親子観

1978年に世界初の試験管ベビー (体外受精児) が誕生して以来、**生殖革命**とよばれるほど、さまざまな生殖技術が開発され、医療として臨床応用されてきた。

新しい生殖医療が普及するにつれて、出産の可能性が拡大され、不妊の悩みをもつ人々の、子どもがほしいという願いはかなえられやすくなった。その一方で、たとえば精子・卵子・受精卵の凍結保存技術は、生殖を時間と空間の制約から解放した。凍結受精卵を用いれば、両親が亡くなった後、その遺伝的な子どもが生まれることさえ可能である。

このように、新しい生殖技術の多くは、人間の精子・卵子・受精卵などの生殖物質を身体から切り離して用いることができるため、それらを自由に組み合わせたり、実験材料や商品とすることも可能となる。

また、子の生物学的な母は産んだ女性であるという、不変と思われた事実が崩れる事態も生じるようになった。これまでの親子観や家族観を大きく変えてしまうことも懸念されている。

### 課題 調べてみよう

不妊の日本人夫妻が、夫の精子を日本の病院で採取後、凍結して海外に空輸し、有料で卵子の提供を受けて夫の精子で受精させ、別の代理母の子宮に移植して出産に成功した例がある。

この場合、生まれた子どもには、卵子を提供した遺伝上の母、出産した代理母、養育する社会的母という3人の母が存在する。

この事例では、どのような問題が心配されるだろうか。

## 脳死と臓器移植の問題点

脳死状態は、人工呼吸器が医療現場に普及する1950年代ごろに出現した。当初は「不可逆昏睡」などとよばれたが、臓器移植の普及に伴い「脳死」とよび替えられ、人の死とみなされて臓器移植の対象になっていく。

日本では1997年に、脳死状態からの臓器提供を可能とする**臓器移植法**が成立した。しかし、脳死を一律に人の死とすることには反対論も根強く、この時は、臓器提供と脳死判定に関して本人が同意し家族が拒まない場合に限り、脳死を死と認めた。



3 顕微授精 顕微鏡で見ながら、卵子に精子を直接注入する。

▶1 新しい生殖医療 人工授精、体外受精、顕微授精、出生前診断、代理出産、精子バンク・卵子バンク、男女生み分け、胎児診断、受精卵や卵子の凍結保存などがある。人工子宮の研究も進められている。

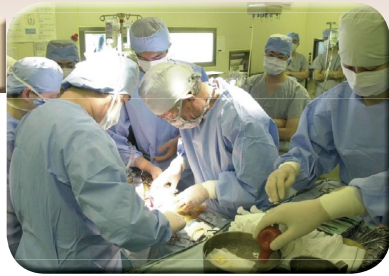
▶2 子どもの側の権利 生殖補助医療によって子どもをもちたいと願う人々の「子どもへの権利」だけが優先され、肝心の「生まれてくるはずの子どもの権利」に対する考慮が不十分だという批判も起こっている。たとえば、匿名を条件に第三者から提供された精子を使うDI (非配偶者間人工授精、AIDともよばれる) で生まれた人たちが、遺伝上の父親が誰かという「出自を知る権利」の保障を求めるという事態が生じている。

日本も批准している「子どもの権利条約」には、「子どもはできる限り、その父母を知る権利がある」と記されている。

▶3 脳死 脳死 (全脳死) とは、脳幹を含む全脳の機能が不可逆的に停止した状態のことである。



### 1 脳死者からの臓器移植の手術 (2000年、信楽園病院、新潟県)



▶1 日本における脳死者からの移植 日本初の心臓移植が1968年に実施されたが、脳死判定や移植の必要性などをめぐる疑惑が問題となった。

それ以降、1999年に臓器移植法成立後初の脳死移植が行われるまで、日本では脳死者からの心臓・肝臓移植などは行われなかった。

### ▶2 臓器移植法の改正

おもな改正点は次の3点。  
・本人が拒否していない場合は家族の同意で提供できる  
・提供は15歳以上という年齢制限を撤廃  
・親族への優先的提供の意思表示を認める

### ▶3 脳死をめぐる議論

日本では、1990年代初めを中心に「脳死は人の死か」が大きな議論となった。脳死者は生きているように見えるからである。人工呼吸器などの助けを借りているとはいえ、体は温かく、汗も涙も流す。妊婦であれば出産も可能である。

▶4 生命技術の利用に対する規制 生命技術の利用に関して、アメリカでは、個人の自己決定権にゆだね、商業化を推し進める傾向がある。

それに対し、ヨーロッパでは、人権の公共面を維持するため公益を重視し、生命技術の利用や商業化に一定の制限を加えている。

臓器移植法は2009年に改正されたが、臓器提供時を除き、脳死を死とすることは改正法でも認められていない。臓器移植の問題点としては、多額の費用が必要なことや、移植を受けるレシピエントが生涯、免疫抑制剤を飲み続けなければならない、免疫力低下によりウイルス性疾患に感染する危険性も大きいことなどがあげられる。

移植用臓器の不足も深刻な問題である。移植医療が盛んな国々でもドナー（臓器提供者）不足は深刻で、待機患者の死亡数も多い。発展途上国の貧しい人々の臓器を富裕な外国人が買う臓器売買も後を絶たない。このため、日本では、肉親間の生体移植が数多く行われている。しかし、健常者の臓器の一部を摘出することは危険が大きい、批判も強い。

## 人体の資源化・商品化

脳死と臓器移植を推進する医療の背後には、人間を精神と機械の身体からなるとみなす心身二元論の身体観・死生観があるといわれる。この見方に立てば、精神(心)の座である脳が機能を不可逆的に停止すれば、それが「死」である。したがって、脳死を人の死とみなすことに問題はないことになる。また、身体は機械であるから、臓器は交換可能な部品となる。こうした身体観に功利主義の発想が加われば、死後の身体は有効に利用すべき資源とみなされる。

さらに、市場経済のもとでは、人体の商品化の可能性がつきまとう。現実には、アメリカでは、人間の死体から組織を回収・加工して高額の手数料を取る「組織バンク」とよばれる企業が成長している。

さまざまな人体組織の利用が加速するなかで、倫理的・法的な基本ルールの確立が急務となっている。しかし、根本的には、身体とその一部を、たんなる物質として、私的所有物として、譲渡や売買の対象として扱うことの意味を問い直すことが求められている。

### 課題 話しあってみよう

世界全体で見れば、多くの人々が、先端医療どころか最低限の医療さえ受けられない状態にある。公平な医療資源の配分をどう実現すべきか、話しあってみよう。

## 再生医療の可能性と課題

再生医療とは、病気や外傷などで損傷した生体の機能を、幹細胞などを用いて復元させる医療技術である。

再生医療は、これまで治療困難だった疾患や障害を完治したり、現在の臓器移植が抱えるドナー不足や拒絶反応などの問題を克服できる可能性をもち、革新的医療として期待されている。現在、体性幹細胞、ES細胞（胚性幹細胞）、iPS細胞（人工多能性幹細胞）の3種類の細胞で研究が進行している。

ES細胞は、生体を構成するあらゆる組織に分化する能力をもつため「万能細胞」ともよばれる。しかし、他人の受精卵を壊して作製されるという倫理的問題を抱える。また、他人の細胞に由来するため拒絶反応が避けられない。

拒絶反応の問題を解決する技術としては、1996年にクローン羊「ドリー」を作り出した体細胞核移植がある。しかし、この技術は別の深刻な倫理問題を引き起こした。不可能と考えられていた哺乳類の体細胞クローン作製が現実のものとなり、この技術を応用してクローン人間を作製することを禁止すべきだという議論が世界的に高まったのである。

iPS細胞は、実用的で、倫理的問題を回避できる方法として治療への応用が期待されている。患者自身の細胞から得られるため、ES細胞がもついずれの問題も克服可能であり、究極の自己細胞治療への扉を開いたといわれる。ただし、男性から卵子、女性から精子を作製できるため、倫理的課題は残る。

## ヒトゲノム研究

2003年、ヒトゲノム（人間の遺伝情報の全体）の解読完了が宣言され、ヒトゲノム研究は、医療などへの応用をめざす段階へと進んだ。遺伝子レベルでの病気の予防や治療、医薬品の開発など、多方面で画期的な応用が期待されている。

しかし、大きな期待の反面、さまざまな倫理的・法的・社会的問題を引き起こすことが心配されている。すでに、就職、結婚、生命保険契約などで、遺伝情報による差別や排除の問題が現実には発生している。

ヒトゲノムの研究によって、すべての人が何らかの欠陥遺伝子をかかえており、遺伝的に不完全な存在という意味で「平等」であることがわ



▶2 体細胞核移植の技術によって生まれたクローン羊ドリーとその子ボニー

▶5 幹細胞 組織や臓器に成長するもととなる細胞。未分化の状態では増殖能力を維持している。

▶6 体性幹細胞 神経や血管、筋肉など特定の細胞のもととなる幹細胞。一定の種類の細胞にしか分化できない。患者から体性幹細胞を取り出し、体外で培養して殖やした後、再び患者に移植して各種の組織や器官を再生・修復する試みが進んでいる。

▶7 クローン技術に対する規制 日本でも、ヒトクローン技術規制法が2001年から施行され、ヒトクローン胚を母胎に入れる行為は禁止された。しかし、クローン人間育成につながる範囲でのヒトクローン胚の研究は認められた。

▶8 iPS細胞 皮膚などの体細胞に遺伝子を導入してつくり出した万能細胞。

▶9 ゲノム 細胞の染色体中のDNA全体をゲノムと呼ぶ。ゲノムとは、生物それぞれの種に固有な遺伝情報の総体のこと。

▶10 ヒトゲノム研究の応用 個人のゲノム情報にもとづいたパーソナルゲノム医療などが可能となると考えられる。





### ヒトゲノムと人権に関する世界宣言

(1997年 第27回ユネスコ総会で採択)

#### 第1条

ヒトゲノムは、人類のすべての構成員が基本的に一体のものであること、並びにこれら構成員の固有の尊厳及び多様性を認識することの基礎である。象徴的な意味において、ヒトゲノムは、人類の遺産である。

#### 第2条

何人も、その遺伝的特徴の如何を問わず、その尊厳と人権を尊重される権利を有する。その尊厳ゆえに、個人をその遺伝的特徴に還元してはならず、また、その独自性及び多様性を尊重しなければならない。

▶1 **ゲノムの差異** ヒトゲノムの個人差に関わるパーソナルゲノムは、全体のわずか0.4%であるが、この差異が個々人の遺伝的特性の違いとなってあらわれる。

▶2 **遺伝情報についての権利** 遺伝情報の保護のためには、自分の遺伝情報について「知る権利」「知らないでいる権利」「他人に知られない権利」の三つが尊重されなければならない。

▶3 **尊厳死** 尊厳死は、患者本人の意思に基づき意図的に死期を早めて苦痛から解放する**安楽死**と類似している。しかし、致死薬の投与などを行う**積極的安楽死**に対して、**尊厳死**は生命維持治療を控えたり中止する**消極的安楽死**に近い。

かってきた。個々人のゲノムはひとりずつ違っており、ゲノムの面でも個人の多様性の尊重が大事だということも明らかになった。こうした認識を広めていくことが重要であろう。

### 課題 話しあってみよう

ヒトゲノム情報は人類共通の財産ともいわれる。ところが、遺伝情報は巨大な経済的利益につながるため、ビジネスの分野を中心に、遺伝子特許の激しい競争が起こっている。

ヒトゲノム情報を特許の対象とすることの是非をめぐって、ディベートなどを実施してみよう。

## 死を問い直す

急速な社会の高齢化と延命医療の進歩を背景として、**尊厳死**や**安楽死**、ホスピスなど、**終末期医療**をめぐる議論が盛んになっている。

**尊厳死**とは、患者の自己決定にもとづき、意味のない治療を打ち切って人間としての尊厳性を保って自然な死を迎えることである。あらかじめ**尊厳死**を希望する意思を文書化しておく「**リビングウィル**」(生前の意思表示)も広まりつつある。

病院での死が7割以上となり、家族からも**隔離**されて死を迎える人が増加した。そうした延命のみを追求する医療への反省から、患者の生活の質(QOL, quality of life)を高める全人的なケア(看護)の重要性が見直されるようになった。

近代的な死生観そのものを問い直す動きもおこっている。近代の産業社会では、ともすれば生産性や効率の側面からのみ人間をとらえる傾向が見られた。病いや老いは失速、死は虚無への墜落のようにマイナスのイメージのみでみられがちになった。時間的な延命だけをめざし死を敗北とみなす近代医療も、同様の発想に立つといえる。

だが、こうした発想では、すべての人の人生が死という敗北で終わることになってしまう。この矛盾を隠蔽するため、死は日常の場面から隠されタブー化されていった。

しかし、世界の中に生まれ生きることが、他のすべての生き物と豊かに交歓することであり、死は生命と時の大きな流れの中に帰っていくことである。人の生と死を地球の全生命とその歴史とのかかわりの中でとらえ直そうという研究が、ゲノム解析の進展などにより、生命科学においても始まろうとしている。

## ゲノム解析が解き明かす生命の歴史

たとえば、ヒトのゲノム配列は99.6%が共通で、他の種と比べて極端に個体差が少ないことがわかってきた。全人類は、10~15万年前に東アフリカに住んでいた1万人ほどの創始者集団の共通の子孫であると推定されている。

その意味では、人類はひとつのファミリーであり、厳密に生物学的観点からは人種の違いは存在しない。また、マウスの遺伝子の95%以上は、ヒトゲノムと合致することなど、さまざまなことが明らかになりつつある。

このように、ゲノム解析の進展とともに、地球上の何千万種もの生物の関係、38億年の生命進化の歴史、そして、そうした生命の関わりと流れの中でとらえ直した人間の生物学的な特質などを解き明かそうとする研究が本格化していくものと思われる。

## 私たちはどこへ行くのか 科学技術と人間の尊厳

私たちのすべての細胞内のDNAには、遺伝情報のかたちで生命のしくみとその歴史が書き込まれている。ヒトゲノムやさまざまな生物のゲノムの解析・研究は、今後、生物進化、発生と死などのしくみを解明し、これまでの生命観、進化観、人間観に大きな革新をもたらす可能性がある。しかし、そうした新たな価値観の確立や社会の受け入れ態勢を待たずに、新たな生命技術が次々と開発され利用されていく。

たとえば、遺伝子診断技術の発達により、受精卵の段階で遺伝的疾患の有無によって「生命の選別」を行うことが可能となり、「優秀」な子孫だけを残そうとする**優生思想**につながるという批判がおこっている。

また、あらゆる生物の遺伝子を自在に改変できる**ゲノム編集**と呼ばれる技術の研究と実用化も急速に進展している。

科学技術の急速な進展によって生じる倫理的諸問題に対し、ユネスコは、2005年に「生命倫理と人権に関する世界宣言」を採択し、普遍的な生命倫理原則を提起した。「人間の尊厳、人権及び基本的自由の全面的な尊重」、「遺伝子構成も含めた未来世代の保護」「環境、生物圏及び生物多様性の保護」など、尊重されるべき諸原則が示されている。

人間の尊厳は、人間性についての理解に支えられてきた。「人間とは何か」についてのこの共通理解がいまや科学技術によって変貌しつつある。「私たちはどこから来たのか? 私たちは何者なのか? 私たちはどこへ行くのか?」——19世紀末に画家のゴッガンが投げかけたこの問いを、21世紀の私たちは、ゴッガンが想像もしなかった意味合いをも含めて、問い直さざるをえなくなったのである。

▶4 **ホスピス** 死期の近い患者を入所させ、苦痛や死への恐怖を緩和し、安らかな死を迎える援助を行う施設。

▶5 **QOLとSOL** QOLという言葉は「生命の質」という観点で用いることもある。この意味においては、生きていくに値する人間らしい生であるかという質を問うが、「質の低い」生命の軽視につながりかねないという危うさもはらむ。

この意味でのQOLは、SOL (sanctity of life, 「生命の尊厳」) と対比されることがある。SOLの考え方では、生命は神聖不可侵なものであり、人の手で絶ってはならないとする。

▶6 **個人の死生観の尊重** 延命治療を受けるかどうかは患者の意思に委ねられるようになり、一人ひとりの死生観が重んじられるようになってきた。

▶7 **遺伝子技術による人間の操作** 将来は、子孫にも影響をおよぼす生殖細胞への遺伝子操作が容認される可能性や、親が望んだ遺伝子を組み込んだ子ども(デザイナー-チャイルド)をつくるのが商業主義と結びついて普及するおそれもある。



# 経済はどうあるべきか

## 資本主義の発展と問題

今日では、世界の経済の主流は、**私有財産制と市場メカニズム**という二つの制度によって成り立っている**資本主義経済**となっている。

資本主義は、シュンペーターがいうように、市場経済の下で「創造的破壊」としての技術革新を促し、生産性を向上させた。私有財産の拡大に貢献し、その点では人々の幸福を増進したともいえる。資本主義は、利潤と効用の最大化に適したシステムであると考えられてきた。

しかし、資本主義にもさまざまな問題が生じている。会社が株主の利益を優先するあまり、短期的な利益確保に走って従業員の待遇が悪化したり、法に触れる活動を行ったりすることが問題になった。

また、グローバル化する自由な市場経済は、豊かな社会をつくったが、地域間格差や、ひとつの社会の中での貧富の差を生み出した。

さらに、富の追求が現実のモノの売り買いからカネの売り買いに移行し、直接的にカネを増やすことが目的化している。ヘッジファンドのような投機マネーが短期的な資金移動を行うことで、石油や穀物などのモノの価格が乱高下したり、多くの国でバブルと経済危機を繰り返したりしている。各国の財政においても、債務の拡大などの不安が増大している。

## 社会主義経済の挫折

私有財産制と市場メカニズムのしくみが不平等や格差を生み出すことは、すでにルソーらによって指摘されていた。

マルクスは、資本主義経済が貧富の差と労働者からの搾取、ひいては人間的な生き方からの疎外を生み出すとして批判し、平等で幸福な社会は共産主義によってしか実現しないと主張した。

しかし、ロシア革命(1917年)によって始まった社会主義という実験は、結果としては失敗に終わった。

その原因としては、社会主義が官僚的な政治システムに陥ったり自由を抑圧したこともあるが、経済的には生産手段の社会的所有と計画経済が技術革新や生産性の向上を生み出さず、豊かな富の創造に失敗したことにある(この場合の富は需要側からいえば効用であり、供給側からいえば利潤で、それぞれの最大化が追求されたかどうかということである)。



1 世界の主要な市場で株価が下落したことを示している掲示板(2008年)

● シュンペーター (1883~1950)  
オーストリア生まれの経済学者。資本主義は技術革新によって発展するとした。



2 商品がない店内(ソ連, 1991年) 社会主義経済が行きづまり、末期のソ連では市場経済への移行が図られたが、移行にも困難がともない経済は混乱した。

本来の市場経済、資本主義をアダム=スミスに即してみると、彼は、各人が自由に私的な利益を追求すれば、市場があたかも神の「見えざる手」に導かれるように資源が最適に配分され、生産性が高まり、富が増大すると考えた。

ただしスミスは、自由な利益を追求するホモ=エコノミクス(経済人)の前提に、人間は「公平で不偏不党な観察者」を自分の中にもち、その観察者から共感が得られるような行為、他者の幸不幸をともに感じる事ができる道徳感情があるという立場をとっていた。このような立場からは、私利の追求が無際限に行われることは想定されていなかった。

## 企業の社会的責任と市民の動き

このような状況に対して、当初は株主利益の観点から行われてきた**コーポレート=ガバナンス(企業統治)**は、株主だけでなく顧客や取引先、従業員などあらゆるステークホルダー(利害関係者)を考慮に入れるべきであると考えられるようになった。

企業は営利を目的としており、それは当然であるが、利潤の追求がステークホルダーの犠牲の上に成り立つことは、現在では非難されるものである。たとえばコーヒー産業では、先進国の大企業に支配され、発展途上国の生産者やコーヒー労働者が低賃金・低収入に苦しむことも多かった。これに対して、生産者の生活を保障し、消費者にも安全などの利益のある公正な貿易・取り引きを行うフェアトレードもみられるようになった。この活動は、当初はグローバルな産業に対抗する市民運動として行われることが多かったが、今日では大手の企業がフェアトレードを行うこともある。

コーポレート=ガバナンスにおいては、コンプライアンス(法令遵守)が必要とされる。このコンプライアンスには、法律だけでなく社会規範も含んで考えられるべきである。また、ディスクロージャー(情報公開)やアカウンタビリティ(説明責任)なども実行することが求められている。

このように、企業も利潤の追求だけ



3 フェアトレードの商品 発展途上国の生産者と先進工業国の消費者の対等なパートナーシップにより、南北問題や地球環境問題、発展途上国の文化に対する関心を高めることも期待されている。



人間がどんなに利己的なものと想定されるにしても、あきらまにかれの本性のなかには、いくつかの原理があって、それらは、かれに他の人びとの運不運に関心をもち、かれらの幸福を、それを見るという快樂のほかにはなにも、かれはそれらからひきださないのに、かれにとって必要なものとするのである。(アダム=スミス『道徳感情論』)

▶1 コーポレート=ガバナンス 企業経営(マネジメント)の監視や経営の方向づけを意味する。

▶2 内部告発制度 コーポレート=ガバナンスに反する行為がなされた場合、つまり企業が不正を行ったようなときに、従業員は企業に対する忠誠という義務もあるが(これは守秘義務のような形で制度化されている場合もある)、社会への責任を優先させて真実を明らかにする(内部告発)ということがある。

これは公益通報制度として法制化されている。この制度は、公益のために企業の不正などを通報した者が、不利な扱いを受けないように、保護するというものである。





**1 企業による社会貢献活動**  
(琵琶湖の沿岸で環境保全活動を行う銀行員)

この銀行では、役職員が地域の環境保全活動に取り組んでいる。

また、銀行の本業である金融を通じて、環境保全事業への融資や、定期預金に学校の環境学習への支援を組み込んだ商品の開発などを行っている。これらの社会貢献活動は、近江商人の精神を受け継ごうとするものであるという。

近江商人の精神とは「売り手よし、買い手よし、世間よし」の「三方よし」といわれるもので、商売とは売り手の利益だけではなく買い手の利益にもなり、さらに社会の利益にもなるべきであるという理念である。(日本の商業道徳について →p.93石田梅岩の項参照)

**▶1 リバタリアニズム**

このような立場を徹底させて、経済が成長しなくても、個人の所有権と自由を守ることが当然なことであるという立場を、リバタリアニズム(自由至上主義)という(→p.168)。ノージック、ハイエク(1899~1992)が代表的である。

でなく、一市民として責任を負うべきであるという考え方が強まった。これがCSR(corporate social responsibility)(企業の社会的責任)である。CSRの例としては、メセナ(メセナ)(芸術文化活動への支援)、フィランソピー(フィランソピー)(社会貢献)などの活動がよく挙げられるが、企業の本来の活動を通じて社会に貢献することも期待されている。

さらに、利潤最大化という企業目標を自明なものとしてせず、失業や貧困、安全や環境などの社会問題の解決を目的とする企業として、社会的企業(ソーシャル・ビジネス)が世界的に注目されている。社会的企業は、ボランティアやチャリティ事業とは違って、有料で商品やサービスを提供し、収益を上げて自立的に運営される。たとえば、マイクロクレジットとよばれる貧困層の自立のための融資を行う金融機関や、ホームレスの自立を促す雑誌販売業、安全な商品を適正な価格で供給する企業などが知られている。

本来、利潤追求の典型的な活動である投資についても、新たな動きがみられる。町おこしや福祉、環境など、通常の投資が受けにくい地域で社会貢献をめざす産業などに、一般市民や地域の企業が、少額でも資金を集めて投資する市民ファンドが生まれている。一般の投資会社でも、社会貢献している企業などに選択的に投資するSRI(socially responsible investing)(社会的責任投資)を行ったりするようになってきている。

**望ましい経済のあり方の模索**

どのような経済制度が望ましいか、市場の失敗に対して政府はどの程度介入したほうがよいのか、現在もさまざまな立場から議論が続いている。ここでは異なった倫理的な立場からの主張を紹介する。

**●新自由主義の立場●**

自由な市場経済を擁護する立場に、新自由主義(neoliberalism)(ネオリベラリズム)がある。アメリカのフリードマン(M.Friedman)が代表的である。

彼らは市場で企業や家計が自由に経済活動を行えば、絶えず技術革新(かくしん)が起き、生産性が向上して資源が適正に配分され、社会全体の富は増えると考えている。市場競争を保ったり、社会秩序(ちつじよ)を維持したりすることは政

府が行うべきだが、それ以上のことを求めない。「小さな政府」の立場である。

社会的不平等は発生するが、それに対しては、豊かな者が投資や消費を行うことで経済活動全体が活発になってこそ、失業は減るし、低所得者の収入も増大すると考える。

政府が累進課税を強化したり、社会保障を増やしたりすると、豊かな者の意欲をそぎ、競争による社会の発展や個人の成長を阻害する。倫理や道徳は社会に自然に生まれたものであるから、企業や経済活動に強制すべきではないと主張する。

この立場は、そもそも人間はホモ・エコノミクスであって、欲望の充足、物質的富の増大が主要な関心であるという面を重視しているといえよう。

**●リベラリズムの立場●**

ロールズやセンらの立場は、リベラリズムに分類される。彼らの立場からすると、機会の均等が保障されれば、市場における競争は容認される。ただ格差が極端になって競争そのものができなくなったり、人間としての尊厳が失われたりすることは防がなければならない。政府は、労働政策や社会保障政策などを通じて、積極的に市場経済に介入すべきである。

このような立場の背景には、ロールズの、人間の尊厳を重んじ、各自が善いと思う生き方を認めようとする思想や、センの、人間の生き方の幅(はば)(潜在能力)を保障すべきという主張などがある。人間をたんなる経済的欲求の充足をめざす生き物と考えないところが、リベラリズムの根底にはある。

**課題 考えてみよう**

以下の問題について、ネオリベラリズムやその元となった功利主義(こうりしぎ)、これに反対するリベラリズムの立場などに立ってみると、どのような主張になるかを想定して書いてみよう。

1. 自由な市場経済と競争、その結果の不平等を、どの程度認めるか？
2. 国家は市場にどの程度介入すべきか？

新自由主義		リベラリズム
最小限	政府の介入(規制)	必要に応じ積極的
投資や消費による経済の活性化	貧困への解決策	労働政策や社会保障
成長重視	経済成長への態度	各人の幸福度重視
社会道徳に介入しない	倫理的態度	正義重視

**2 新自由主義とリベラリズムの比較**

**▶2 トマ・ピケティの立場**

フランスの経済学者トマ・ピケティ(1971~)によれば、資本主義経済においては、ほとんどの時代で、 $r$ (資本収益率) $>$  $g$ (経済成長率)になっている。資本とは資産のことであり、かつては土地、現在は金融資産である。経済成長率は賃金の上昇を意味している。資本収益は資産として受け継がれていくので、 $r > g$ が続くと、もてる少数の者と大多数の働く者のあいだでの経済格差が拡大していく。このような格差を縮めるためには、グローバルな資産課税や累進課税が必要であると主張する。